

ぼえさふらへ。いまだ信心さだまらざらんひとは臨終をも明し來迎をもまたせたまふべし。この御ふみぬしの御名は隨信房とおほせられさふらはむ、めでたくさふらふべし。この御ふみのかきやう、めでたくさふらふ。御同行のおほせられやうはこゝろえずさふらふ。それをばちからをよばずさふらふ。あなかしこく。

十一月廿六日

親 鸞

隨信御房

御ふみたびくまいらせさふらひき。御覽ぜずやさふらひけん。なにごとよりも明法御房の往生の本意とけておはしました候こそ、常陸國うちのこれにこゝろざしおはしますひとびとの御ために、めでたきことにてさふらへ。往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにてさふらはず、めでたき智者もはからふべきことにもさふらはず。大小の聖人だにもともかくもはからはで、たゞ願力にまかせてこそおはしますことにてさふらへ。ましてをののやうにおはしますひとくは、たゞこのちかひありとき、南無阿彌陀佛にあひまいらせたまふこそ、ありがたくめでたくさふらふ。御果報にてはさふらふなれ。とかくはからはせたまふことゆめくさふらふべからず。さきにくだしまいら

せさふらひし唯信鈔、自力他力なんどのふみにて、御覽さふらふべし。それこそこの世にとりてはよきひとくにておはします。すでに往生をもしておはしますひとくにてさふらへば、そのふみどもにかゝれてさふらふには、なにごとくも、すぐべくもさふらはず。法然聖人の御をしへをよくく御こゝろえたるひとくにておはしますにさふらひき。さればこそ、往生もめでたくしておはしましたさふらへ。おほかたは、としごろ念佛まふしあひたまふひとくのなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみまふしあはれて候ひとくもさふらひき。いまもさめさふらふらんとおぼえさふらふ。明法房などの往生しておはしますも、もとは不思議のひがごとをおもひなごしたるこゝろをもひるがへしなごしてこそさふらひしか。われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることはあるべくもさふらはず。貪欲の煩惱にくるはされて欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり、愚癡の煩惱にまどはされて、おもふまじきことなどもおこるにてこそさふらへ。めでたき佛の御ちかひのあればとて、わざとすまじきことをもし、おもふまじきことをもおちひなどせんは、よくこの世のいとはしからず、身のわろきことをおもひしらぬにてさふらへば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにもこゝろざしのおはしませぬにてさふらへば、念佛せさせたまふとも、その

御こゝろざしにては順次の往生もかたくさふらふべからん。よく／＼このよしをひと／＼にきかせま
いらせたまふべくさふらふ。かやうにもまふすべくもさふらはねども、なにとなくこの邊のことを御
こゝろにかけあはせたまふひと／＼にておはしましあひてさふらへば、かくもまふしさふらふなり。こ
の世の念佛の義はやう／＼にかはりあふてさふらふめれば、とかく申におよばずさふらへども、故聖
人の御をしへをよく／＼うけたまはりておはしますひと／＼は、いまももとのやうにかはらせたまふ
ことさふらはず。世かくれなきことなればきかせたまひあふて候らん浄土宗の義、みなかはりておは
しましあふて候ひと／＼も、聖人の御弟子にてさふらへども、やう／＼に義をいひかへなどして、
身もまどひ、ひとをもまどはかしあふてさふらふめり。あさましきことにてさふらふなり。京におお
ほくまどひあふてさふらふめり。ゐなかは、さこそさふらふらめとこゝろにくゝもさふらはず。なに
ごともまふしつくしがたくさふらふ。また／＼まふしさふらふべし。この明教房ののぼられて候こと、
まことにありがたきこと、おぼえさふらふ。明法御房の御往生のことをまのあたりきゝさふらふも、
うれしくさふらふ。ひと／＼の御こゝろざしもありがたくおぼえさふらふ。かた／＼このひと／＼の
のぼり不思議のことにさふらふ。このふみをたれ／＼にもおなじこゝろによみきかせたまふべくさふ
らふ。このふみは奥郡におはします同朋の御中にみなおなじく御覽さふらふべし。あなかしこ／＼。

としごろ念佛して往生ねがふしるしには、もとあしかりしわがこゝろをもおもひかへして、とも同
朋にもねんごろにこゝろのおはしましあはゞこそ、世をいとふしるしにてもさふらはめとこそ、おぼ
えさふらへ。よく／＼御こゝろえさふらふべし。善知識ををろかにおもひ、師をそしるものをば謗法
のものとまふすなり。をやをそしるものをば五逆のものとまふすなり。同座せざれとさふらふなり。
されば北の郡にさふらひし善證房は、をやをのり善信をやう／＼にそしりさふらひしかば、ちかづき、
むつまじくおもひさふらはでちかづけず候き。明法御房の往生のことをきながら、あとををろかに
せんひと／＼は、その同朋にあらずさふらふべし。無明の酒にえひたる人によ／＼えひをすゝめ、
三毒をひさしくこのみくらふひとによ／＼毒をゆるして、このめとまふしあふてさふらふらん。不便
のことにさふらふ。無明の酒にえひたることをかなしみ、三毒をこのみくふて、いまだ毒もうせはて
ず、無明のえひもいまださめやらぬにおはしましあふてさふらふぞかし。よく／＼御こゝろえさふら
ふべし。方々よりの御こゝろざしのもども、かすのまゝにたしかにたまはりさふらふ。朋教房のの
ぼられてさふらふこと、ありがたきことにさふらふ。かた／＼の御こゝろざしまふしつくしがたくさ
ふらふ。明法御房の往生のことおどろきまふすべきにはあらねども、かへす／＼うれしくさふらふ。
鹿島なめかた奥郡かやうの往生ねがはせたまふひと／＼の、みな御よろこびにてさふらふ。またひ

らつかの入道殿御往生のこと、きゝさふらふこそ、かへすくまふすにかぎりなくおぼえさふらへ。めでたさまふしつくすべくもさふらはす。をのくみな往生は一定とおぼしめすべし。さりながらも往生をねがはせたまふひとくの御中にも、御ころえぬこともさふらひき。いまもさこそ候らめとおぼえさふらふ。京にもころえずして、やうくにもまどひあふてさふらふめり。くにんにもおほくきこえさふらふ。法然聖人の御弟子のなかにも、われはゆゑしき學生など、おもひあひたるひとくもこの世にはみなやうくに法文をいひかへて、身もまどひ、ひとをもまどはして、わづらひあふてさふらふめり。聖教のをしへをもみずしらぬをのくのやうにおはしますひとくは、往生にさはりなしとばかりいふをきいて、あしざまに御ころえあること、おほくさふらひき。いまもさこそさふらふめとおぼえさふらふ。淨土の教もしらぬ信見房などがまふすことによりて、ひがさまにいやくになりあはせたまひさふらふらんをき、候こそ、あさましくさふらへ。まづをのくのむかしは彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしましたさふらひしが、釋迦・彌陀の御方便にもよをされて、いま彌陀のちかひをもき、はじめておはします身にてさふらふなり。もとは無明の酒にえひて貪欲、瞋恚、愚癡の三毒をのみこのみめしあふてさふらひつるに、佛のちかひをき、はじめしより、無明のえひもやうくすこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのまですして阿彌陀佛のくすりをつねに

このみめす身となりておはしましたあふてさふらふぞかし、しかるになをえひもさめやらぬにかさねてえひをすゝめ、毒もきえやらぬになを毒をすゝめられさふらふらんこそ、あさましくさふらへ。煩惱具足の身なればとて、ころにまかせて身にもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、ころにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもころのまゝにてあるべしとまふしあふてさふらふらんこそ、かへすく不便におぼえさふらへ。えひもさめぬさきになをさけをすゝめ、毒もきえやらぬにいよゝ毒をすゝめんがごとし。くすりあり毒をこのめとさふらふらんことはあるべくもさふらはすとこそ、おぼえさふらふ。佛の御名をもきゝ、念佛をまふして、ひさしくなりておはしますさんひとくは、後世のあしきことをいとふしるし、この身のあしきことをばいとひすてんとおぼしめすしるしもさふらふべしとこそ、おぼえさふらへ。はじめて佛のちかひをき、はじむるひとくの、わが身のわろく、ころのわろきをおもひしりて、この身のやうにては、なんぞ往生せんするといふひとこそ、煩惱具足したる身なれば、わがころの善惡をばさたせずむかへたまふぞとはまふしさふらへ。かくきゝてのち、佛を信ぜんとおもふころふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとひ流轉せんことをもかなしみて、ふかくちかひをも信じ、阿彌陀佛をもこのみまふしなどするひとは、もともころのまゝにて惡事をもふるまひなんどせじとおぼしめしあはせたまは

そ、世をいとふしるしにてもさふらはめ。また往生の信心は釋迦・彌陀の御すゝめによりておこるとこ
そ、みえてさふらへば、さりともまことのことろおこらせたまひなんには、いかゞむかしの御ことろ
のまゝにてはさふらふべき。この御なかのひとくも、少々はあしきさまなることのきこえさふらふ
めり。師をそしり、善知識をころしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよしきよさふらふこ
とあさましくさふらへ。すでに謗法のひとなり。五逆のひとなり。なれむつづべからず。淨土論とま
ふすふみには、かやうのひとは佛法信することろのなきより、このことろはおこるなりとさふらふめ
り。また至誠心のなかには、かやうに悪をこのまんには、つゝしんでとをざかれ、ちかづくべからず
とこそ、とかれてさふらへ。悪をこのむひとにもちかづきなんどすることは、淨土にまいりてのち衆
生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にもしたかひ、ちかづくことはさふらへ。それもわがはからひ
にはあらず、彌陀のちかひによりて御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひもさふらはんすれ。當時
はこの身どものやうにては、いかゞさふらふべからんとおぼえさふらふ。よく／＼案ぜさせたまふ
べくさふらふ。往生の金剛心のおこることは、佛の御はからひよりおこりてさふらへば、金剛心をと
てさふらはんひとは、よも師をそり、善知識をあなづりなんどすることはさふらはじとこそ、おぼ
えさふらへ。このふみをもてかしまなめかた南の莊いづかたもこれにこゝろざしおはしまさんひとに

はおなじ御ことろによみきかせたまふべくさふらふ。あなかしこく。

建長四年二月廿五日

安樂淨土にいりはつれば、すなはち大涅槃をさとるとも、また無上覺をさとるとも、滅度にいたる
ともまふすは、御名こそかはりたるやうなれども、これみな法身とまふす。佛のさとりをひらくべき
正因に彌陀佛の御ちかひを法藏菩薩、われらに廻向したまへるを往相の廻向とまふすなり。この廻向
せさせたまへる願を念佛往生の願とはまふすなり、この念佛往生の願を一向に信じて、ふたごゝろな
きを一向專修とはまふすなり。如來二種の廻向とまふすことは、この二種の廻向の願を信じ、ふたご
ゝろなきを眞實の信心とまふす。この眞實の信心のおこることは釋迦・彌陀の二尊の御はからひより
おこりたりとしらせたまふべし。あなかしこく。

寶號經にのたまはく。彌陀の本願は行にあらず、善にあらず、たゞ佛名をたもつなり。名號はこれ
善なり行なり。行といふは善をするについていふことばなり。本願はもとより佛の御約束とこゝろえ
ぬるには、善にあらず行にあらざるなり。かるがゆへに他力とはまふすなり。本願の名號は能生する
因なり。能生の因といふは、すなはちこれ父なり。大悲の光明はこれ所生の縁なり、所生の縁といふ

はすなはちこれ母なり。

親鸞聖人御消息集

なにごとよりは如來の御本願のひろまらせたまひてさふらふこと、かへすぐめでたく、うれしくさふらふ。そのことにおのゝところぐに、われはといふことをおもふて、あらそふこと、ゆめゆめあるべからずさふらふ。京にも一念多念なんどまふす、あらそふことのおほくさふらふやうにあること、さらくさふらふべからず。たゞ詮するところは、唯信鈔・後世物語・自力他力、この御文どもを、よくくつねにみて、その御ころにたがへず、おはしますべし。いつか、たのひとぐにも、このころをおほせられさふらふべし。なをおほつかなきことあらば、今日までいきてさふらへば、わざともこれへたづねたまふべし。また便にもおほせたまふべし。鹿島、なつかた行方、そのならびのひとびとにも、このころをよくくおほせらるべし。一念多念のあらそひなどのやうに、詮なきこと論じ、ことをのみまふしあはれてさふらふぞかし。よくくつゝしむべきことなり。あなかしこく。かやうのことをころえぬひとぐは、そのことなきことをまふしあはれてさふらふ。よくくつゝしみたまふべし。かへすぐ。

二月三日

御消息集

親鸞

七八七

六月一日の御文、くわしくみさふらひぬ。さては鎌倉にての御うたへのやうは、おろくうけたまはりてさふらふ。この御ふみにたがはずうけたまはりてさふらひしに、別のことは、よもさふらはじとおもひさふらひしに、御くだりうれしくさふらふ。おほかたは、このうたへのやうは、御身ひとりのことにはあらずさふらふ。すべて浄土の念佛者のことなり。このやうは故聖人の御とき、この身どものやうくまふされさふらひしことなり。こともあたらしきうたへにてさふらふなり。性信房ひとりの沙汰あるべきことにはあらず。念佛まふさんひとはみな、おなじころに御沙汰あるべきことなり。御身をわらひまふすべきことにはあらずさふらふべし。念佛者のものにころえぬは、性信坊のとがにまふしなされんは、きはまれるひがごとくにさふらふべし。念佛まふさんひとは、性信坊のかたうどにこそなりあはせたまふべけれ。母姉妹などやうくまふさるゝことは、ふるごとにてさふらふ。さればとて念佛をとめられさふらひしが、よにくせごのおこりさふらひしかば、それにつけても念佛をふかくたのみて、世のいのりにころにいれてまふしあはせたまふべしとぞ、おぼえさふらふ。御文のやう、おほかたの陳狀、よく御はからひどもさふらひけり。うれしくさふらふ。證じさふらふところは、御身にかぎらず念佛まふさんひとくは、わが御身の料はおぼしめさずとも、

朝家の御ため、國民のために念佛をまふしあはせたまひさふらはじ、めでたうさふらふべし。往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふべし。わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念佛、ころにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすべしとぞ、おぼえさふらふ。よく御按さふらふべし。このほかは別の御はからひあるべしとは、おぼえさふらふ。なをくくとく御くだりのさふらふこそ、うれしふさふらへ。よく御ころにいれて往生一定とおもひさだめられさふらひなば、佛の御恩をおぼしめさんには、こと事はさふらふべからず。御念佛をころにいれてまふさせたまふべしと、おぼえさふらふ。あなかしこく。

七月九日

親 鸞

性 信 御 坊

護念坊のたよりに、教忍御坊より錢二百文、御ころざしのものたまはりてさふらふ。さきに念佛のすゝめのもの、かたくの御なかよりとて、たしかにたまはりてさふらひき。ひとびとによろこびまふさせたまふべくさふらふ。この御返事にて、おなじ御ころにまふさせたまふべくさふらふ。さ

てはこの御たづねさふらふことは、まことによき御うたがひどもにてさふらふべし。まづ一念にて往生の業因はたれりとまふしさふらふは、まことにさるべきことにてさふらふべし。さればとて、一念のほかに念佛をまふすまじきことにはさふらはず。そのやうは唯信鈔にくはしくさふらふ。よくよく御覽さふらふべし。一念のほかにあまるところの念佛は、十方の衆生に廻向すべしと、さふらふも、さるべきことにてさふらふべし。十方の衆生に廻向すればとて、二念三念せんは、往生にあしきこと、おぼしめされさふらはず、ひがごとにてさふらふべし。念佛往生の本願とこそ、おほせられてさふらへば、おほくまふさんも、一念一稱も、往生すべしとこそ、うけたまはりてさふらへ。かならず一念ばかりにて往生すといひて、多念をせんは往生すまじきとまふすことは、ゆめ／＼あるまじきことなり。唯信鈔をよく／＼御覽さふらふべし。また有念無念とまふすことは、他力の法門にはあらぬことにてさふらふ。聖道門にまふすことにてさふらふなり。みな自力聖道の法文なり。阿彌陀如來の選擇本願念佛は、有念の義にもあらず、無念の義にもあらずとまふしさふらふなり。いかなるひとまふしさふらふとも、ゆめ／＼もちろさせたまふべからずさふらふ。聖道にまふすことを、あしざまにきゝなして、淨土宗にまふすにてぞさふらふらん。さら／＼ゆめ／＼もちろさせたまふまじくさふらふ。また慶喜とまふしさふらふことは、他力の信心をえて往生を一定して、むすよろこぶこと、ろをまふ

すなり。常陸國中の念佛者のなかに、有念無念の念佛沙汰のきこえさふらふは、ひがごとにてさふらふとまふしさふらひにき。たゞ詮するところは、池力のやうは行者のはからひにてはあらずさふらへば、有念にあらず、無念にあらずとまふすことを、あしふきゝなして有念無念などまふしさふらひけるとおぼえさふらふ。彌陀の選擇本願は、行者のはからひのさふらはねばこそ、ひとへに他力とはまふすことにてさふらへ。一念こそよけれ、多念こそよけれなどまふすことも、ゆめ／＼あるべからずさふらふ。なを／＼一念のほかにあまるところの御念佛を、法界衆生に廻向すとさふらふは、釋迦・彌陀如來の御恩を報じまいらせんとて、十方衆生に廻向せられさふらふらんは、さるべくさふらへども、二念三念まふして往生せんひとを、ひがごとはさふらふべからず。よく／＼唯信鈔を御覽さふらふべし。念佛往生の御ちかひなれば、一念十念も往生は、ひがごとにあらずとおぼしめすべきなり。あなかしこ、／＼。

十二月廿六日

親 覺

教忍御坊御返事

まづよろづの佛・菩薩をかりしめまいらせ、よろづの神祇・冥道をあなづりすてたてまつるとまふす

こと、このことゆめくなきことなり。世々生々に無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死をいえずありしゆへに、曠劫多生のあひだ、諸佛菩薩の御す、めによりて、いままうあひがたき彌陀の御ちかひにあひまいらせてさふらふ御恩をしらすして、よろづの佛・菩薩をあだにまふさんは、ふかき御恩をしらすさふらふべし。佛法をふかく信するひとをば、天地におはしますよろづのかみは、かけのかたちこそへるがごとくして、まもらせたまふことにてさふらへば、念佛を信じたる身にて、天地のかみをすてまふさんとおもふこと、ゆめくなきことなり。神祇等だにもすてられたまはず、いかにいはんやよろづの佛・菩薩をあだにもまふし、をろかにおもひまいらせさふらふべしや。よろづの佛ををろかにまふさば、念佛信ぜず、彌陀の御名をとなへぬ身にてこそさふらはんすれ。詮ずるところは、そらごとをまふし、ひがごとをことにふれて念佛のひとくにおほせられつけて、念佛をとめんとするところの領家・地頭・名主の御はからひどものさふらふらんこと、よくくやうあるべきことなり。そのゆへは、釋迦如來のみことには、念佛するひとをそしるものをば、名無眼人ととき、名無耳人とおほせをかれたることにさふらふ。善導和尚は、五濁増時多疑謗、道俗相嫌不用聞、見有修行起瞋毒、方便破壊競生怨と、たしかに釋しをかせたまひたり。この世のならひにて、念佛をさまたけんひとは、そのところの領家・地頭・名主のやうあることにてこそ

さふらはめ。とかくまふすべきにあらず。念佛せんひとくは、かのさまたけをなさんひとをばあはれみをなし、不便におもふて念佛をもねんごろにまふして、さまたけなさんをたすけさせたまふべしとこそ、ふるきひとはまふされさふらひしか。よくく御たづねあるべきことなり。つぎに念佛せさせたまふひとくのこと、彌陀の御ちかひは煩惱具足のひとのためなりと、信ぜられさふらふは、めでたきやうなり。たゞしわるきもの、ためなりとて、ことさらにひがごとをこゝろにもおもひ、身にも口にもまふすべしとは、淨土宗にまふすことならねば、ひとくにもかたることさふらはず。おほかたは煩惱具足の身にて、こゝろをもとめがたくさふらひながら、往生をうたがはずせんとおぼしめすべしとこそ、師も善知識もまふすことにてさふらふに、かゝるわるき身なれば、ひがごとをことさらにこのみて、念佛のひとくのさはりとなり、師のためにも善知識のためにも、とがとなさせたまふべしとまふすことは、ゆめくなきことなり。彌陀の御ちかひにまうあひがたくして、あひまいらせて、佛恩を報じまいらせんとこそ、おぼしめすべきに、念佛をとめらるゝことに沙汰しなされてさふらふらんこそ、かへすくこゝろえずさふらふ。あさましきことにさふらふ。ひとくひがさまに御こゝろえどもさふらふゆへ、あるべくもなきことどもきこえさふらふ。まふすばかりなくさふらふ。たゞし念佛のひと、ひがごとをまふしさふらはず、その身ひとりこそ地獄にもおち、天魔と

もなりさふらはめ。よろづの念佛者のとがなるべしとは、おぼえさふらふ。よく／＼御はからひどもさふらふべし。なを／＼念佛せさせたまふひとく、よく／＼この文を御覽じとかせたまふべし。あなかしこ、く。

九月二日

親 鸞

念佛人々御中

ふみかきてまいらせさふらふ。このふみをひとくにもよみてきかせたまふべし。遠江の尼御前の御こ、ろにいでて御沙汰さふらふらん、かへす／＼めでたくあはれにおぼえさふらふ。よく／＼京よりよろこびまふすよしをまふしたまふべし。信願坊がまふすやう、かへす／＼不便のことなり。わるき身なればとて、ことさらにひがごとをこのみて、師のため善知識のためにあしきことを沙汰し、念佛のひとくのために、とがとなるべきことをしらぬは、佛恩をしらす。よく／＼はからひたまふべし。またものにくるふて死にけんひとくのことをもちて、信願坊がことをよしあしとまふすべきにはあらず。念佛するひとの死にやうも、身よりやまひをするひとは往生のやうをまふすべからず。こゝろよりやまひをするひとは天魔ともなり、地獄にもおつることにてさふらふべし。こゝろよりおこ

るやまひと、身よりおこるやまひとはかはるべければ、こゝろよりおこりて死ぬるひとのことを、よく／＼御はからひさふらふべし。信願坊がまふすやうは、凡夫のならひなれば、わるきこそ本なればとて、おもふまじきことをこのみ、身にもすまじきことをし、口にもいふまじきことをまふすべきやうにまふされさふらふこそ、信願坊がまふしやうとはこゝろえさふらふ。往生にさはりなければとて、ひがごとをこのむべしとは、まふしたることさふらはず。かへす／＼こゝろえさおぼえさふらふ。詮ずるところ、ひがごとまふさんひとは、その身ひとりのこそ、ともかくもなりさふらはめ。すべてよろづの念佛者のさまたけとなるべしとはおぼえさふらふ。また念佛をとめんひとは、そのひとばかりこそ、いかにもなりさふらはめ。よろづの念佛するひとの、とがとなるべしとはおぼえさふらふ。五濁増時多疑謗、道俗相嫌不用聞、見有修行起瞋毒、方便破壊競生怨と、まのあたり善導の御をしへさふらふぞかし。釋迦如來は名無眼人、名無耳人ととかせたまひてさふらふぞかし。かやうなるひとにて念佛をもとめ、念佛者をもにくみなんどすることにてさふらふらん。それはかのひとをにくまずして、念佛をひとくまふして、たすけんとおもひあはせたまへとこそおぼえさふらへ。あなかしこ、く。

九月二日

親 鸞

御消息集

七九五

慈信坊御返事

入信坊・眞淨坊・法信坊にも、このふみをよみきかせたまふべし。かへすべく不便のことにさふらふ。性信坊には、春のぼりてさふらひしに、よく／＼まふしてさふらふ。くけどのにもよく／＼よろこびまふしたまふべし。このひと／＼のひがごとをまふしあふてさふらへばとて、道理をばうしなはれさふらはじとこそ、おぼえさふらへ、世間のことにさふらふぞかし。領家・地頭・名主のひがごとすればとて、百姓をまどはすことはさふらはぬぞかし。佛法をばやぶるひとなし。佛法者のやぶるにたとへたるには、師子の身中の蟲の、しゝをくらふがごとしとさふらへば、念佛者をば佛法者のやぶりさまたけさふらふなり。よく／＼こゝろえたまふべし。なを／＼御ふみには、まふしつくすべくもさふらはず。

九月二十七日の御ふみ、くはしくみさふらひぬ。さては御こゝろざしの錢伍貫文、十一月九日にたまはりてさふらふ。さてはるなかのひと／＼、みなとしごろ念佛せしはいたづらごとにてありけりて、かた／＼ひと／＼やう／＼にまふすなることこそ、かへすべく不便のことにきこえさふらへ。やう／＼のふみどもをかきてもてるを、いかにみなしてさふらふやらん。かへすべくおぼつかなくさふ

らふ。慈信坊のくだりて、わがき、たる法文こそ、まことにてはあれ、ひごろの念佛はみないたづらごととなりとさふらへばとて、おほふの中太郎のかたのひとは九十なんんとかや、みな慈信坊のかたへとて、中太郎入道をすてたるとかやき、さふらふ。いかなるやうにてさやうにはさふらふぞ。詮ずるところ、信心のさだまらざりけるとき、さふらふ。いかやうなることにて、さほどにおほくのひと／＼のたぢろぎさふらふらん。不便のやうとき、さふらふ。またかやうのきこえなんどさふらへば、そらごともおほくさふらふべし。また親鸞も偏願あるものとき、さふらへば、ちからをつくして唯信鈔・後世物語・自力他力の、こゝろども、二河の譬喩なんどかきて、かた／＼へひとびとにくだしてさふらふも、みなそらごとになりてさふらふときこえさふらふは、いかやうにすゝめられたるやらん。不可思議のこと、き、さふらふ。そ、不便にさふらへ。よく／＼きかせたまふべし。あなかしこ、く。

十一月九日

親鸞

慈信御坊

眞佛坊・性信坊・入信坊、このひと／＼のこと、うけたまはりさふらふ。かへすべくなけきおぼえさふらへども、ちからおよばずさふらふ。また餘のひと／＼のおなじこゝろならずさふらふらんも、ち

からおよばずさふらふ。ひとくのおなじころならずさふらへば、とかくまふすにおよばず。いまはひとのうへもまふすへきにあらずさふらふ。よくくころえたまふべし。

親 鸞

慈信御房

さては念佛のあひだのことによりて、ところせきやうにうけたまはりさふらふ。かへすがへすころくるしくさふらふ。詮するところ、そのところの縁ぞつきさせたまひさふらふらん。念佛をさへらるなんどまふさんごに、ともかくもなけきおぼしめすべからずさふらふ。念佛といめんひとこそ、いかにもなりさふらはめ、まふしたまふひとは、なにかくるしくさふらふべき。餘のひとくを縁として、念佛をひろめんとはからひおはせたまふこと、ゆめくあるべからずさふらふ。そのところに念佛のひろまりさふらはんことも、佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊がやうくになふしさふらふなるによりて、ひとく御ころどものやうくにならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへすく不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひにまかせまいらせさせたまふべし。そのところの縁つきておはしましさふらはど、いづれのところにて、うつらせたまひ

さふらふておはしますやうに、御はからひさふらふべし。慈信坊がまふしさうらふことを、たのみおぼしめして、これよりは餘の人を強縁として念佛ひろめよとまふすこと、ゆめくまふしたることさふらはず。きはまれるひがごとにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたけんことは、かねて佛のときをかせたまひてさふらへば、おどろきおぼしめすべからず。やうく慈信坊がまふすことを、これよりまふしさふらふと、御ころえさふらふ。ゆめくあるべからずさふらふ。法門のやうもあらぬさまにまふしなしてさふらふなり。御耳にきいれらるべからずさふらふ。きはまれるひがごとものきこえさふらふ。あさましくさふらふ。入信坊なんども不便におぼえさふらふ。鎌倉にながるしてさふらふらん、不便にさふらふ。當時それもわづらふべくてぞ、さてもさふらふらん。ちからおよばずさふらふ。奥郡のひとく慈信坊にすかされて、信心みなうかれあふておはしましたさふらふなること、かへすくあはれにかなしおぼえさふらふ。これもひとくをすかしまふしたるやうにきこえさふらふこと、かへすくあさましくおぼえさふらふ。それも日ごろひとくの信のさだまらずさふらひけることの、あらはれてきこえさふらふ。かへすく不便にさふらひけり。慈信坊がまふすことによりて、ひとくの日ごろの信のたぢろぎあふておはしましさふらふも、詮するところは、ひとくの信心の、まことならぬことのあらはれてさふらふ。よきことにてさふらふ。それを

ひとくは、これよりまふしたるやうにおぼしめしあふてさふらふこそ、あさましくさふらへ。日ざろやうくの御ふみどもをかきもちておはしましあふてさふらふ甲斐もなく、おぼえさふらふ。唯信鈔やうくの御ふみどもは、いまは詮なくなりてさふらふとおぼえさふらふ。よくくかきもたせたまひてさふらふ、法門はみな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊に、みなしたがひて、めでたき御ふみどもはすてさせたまひあふてさふらふときこえさふらふこそ、詮なくあはれにおぼえさふらへ。よくく唯信鈔・後世物語などを御覽あるべくさふらふ。年ごろ信ありとおほせられあふてさふらひけるひとくは、みなそらごとにてさふらひけりときこえさふらふ。あさましくさふらふ。なにごともく、またくまふしさふらふべし。

正月 九日

眞淨御坊

親 覽

くだらせたまひてのち、なにごとかさふらふらん。この源藤四郎殿におもはざるにあひまいらせてさふらふ。便のうれしさにまふしさふらふ。そのちなにごとかさふらふ。念佛のつたへのこと、しづまりてさふらふよし、かたぐよりうけたまはりさふらへば、うれしふこそさふらへ。いまはよう

く念佛もひろまりさふらはんずらんと、よろこびいりてさふらふ。これにつけても御身の料は、いまさだまらせたまひたり。念佛を御ころにいれて、つねにまふして念佛をしらんひとく、この世のちの世までのことをいのりあはせたまふべくさふらふ。御身どもの料は、御念佛はいまはなにかはせさせたまふべき。たいひがふたる世のひとくをいのり、彌陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはせ、佛の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし。よくく御ころにいれてまふしあはせたまふべくさふらふ。聖人の二十五日の御念佛も、詮するところは、かやうの邪見のものをたすけん料にこそ、まふしあはせたまへとまふすことにてさふらへば、よくく念佛をしらんひとをたすかれとおぼしめして、念佛しあはせたまふべくさふらふ。またなにごとも度々便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便にうれしふてまふしさふらふ。あなかしこ、く。入西御坊のかたへもまふしたふさふらへども、おなじことなれば、このやうをつたへたまふべくさふらふ。あなかしこ、く。

親 覽

性信御坊

ひとくのおほせられてさふらふ十二光佛の御こと、かきしるしてくだしまいらせさふらふ。

くわしくかきまいらせてさふらふべきやうもさふらはず。おろ／＼かきしるしてさふらふ。詮ずるところは、無碍光佛とまふしまいらせさふらふことを、本とせさせたまふべくさふらふ。無碍光佛は、よろづのもの、あさましき、わるきことにはさはりなくたすけさせたまはん料に、無碍光佛とまふすとしらせたまふべくさふらふ。あなかしこ、く。

十月廿一日

親 鸞

唯信御坊御返事

諸佛稱名の願とまふし、諸佛咨嗟の願とまふしさふらふなるは、十方衆生をすゝめんためときこえたり。また十方衆生の疑心をとゞめん料ときこえてさふらふ。彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにてきこえたり。詮ずるところは、方便の御誓願と信じまいらせさふらふ。念佛往生の願は、如來の往相廻向の正業正因なりとみえてさふらふ。まことの信心あるひとは等正覺の彌勒とひとしければ、如來とひとしとも諸佛のほめさせたまひたりとこそきこえてさふらへ。また彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには、義なきを義とすところ大師聖人のおほせにてさふらへ。かやうに義のさふらふらんかぎり、他力にはあらず自力なりときこえてさふらふ。また他力とまふすは、佛智不思議にてさふらふな

り。ときに煩惱具足の凡夫の、無上覺のさとりをえさふらふなることをば、佛と佛とのみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふ。しかれば義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすことは、自力のひとはからひをまふすなり。他力にはしかれば義なきを義とすとさふらふなり。このひと／＼のおほせのやうは、これにはつや／＼としらぬことにてさふらへば、とかくまふすべきにあらずさふらふ。また來の字は、衆生利益のためにはきたるとまふす方便なり。さとりをひらきてはかへるとまふす。ときにしたがひてきたるとも、かへるともまふすとみえてさふらふ。なにごとく／＼また／＼まふすべくさふらふ。

二月九日

親 鸞

慶西御坊御返事

第五部 法語篇

親鸞が時に觸れ物語りし法語の斷片は、今歎異鈔と執持鈔と口傳鈔との三篇に散見して、其の尊き人格の風采を偲ぶに充分である。歎異鈔は親鸞に其の若年時代を親しく奉仕して居た孫の如信が、祖父親鸞の歿後、親鸞の意志に叛く諸種の異端的傾向を歎きつゝ、親鸞の正統的意志を宣明し、邪まなる思想を拂拭せんが爲めに述作したるものである。執持鈔は、本願寺第三世覺如(宗昭)が、其の生涯の念願として法然(源空)親鸞と傳承したる所謂淨土眞宗の正義を宣揚し、以て後世に傳へんとの意志ありしに際して、飛彈の願智坊永承の乞に應じて親しく物語りしを永承の筆記せしものである。口傳鈔は覺如が元弘元年の冬、大谷の御堂に於ける親鸞報恩の會上、其の昔如信より親しく口授せられたる法然、親鸞、如信の口傳を物語り弟子乘專が筆記せしものにかゝる。因みに本篇に於ける親鸞の法語は之れを五號とし、他は六號として法語の部分に明瞭にせんと力めたのであるが、猶ほ法語なりや否や判明に苦しむ點も少からず、其の邊は特に諒を乞ふ次第である。

歎異鈔

竊かに愚案を廻らして粗ぼ古今を勘ふるに、先師口傳の眞信に異することを歎き、後學相續の疑惑有ることを思ふ。幸に有縁の智識に依らずんば、争てか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覺悟を以て他力の宗旨を亂ること莫れ。仍て親鸞聖人御物語の趣、耳の底に留る所ろ、聊か之れを註して、偏へに同心行者の不審を散ぜんが爲めなり。云云

一、彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとすべし。そのゆへは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念佛にまさるべき善なきゆへに。惡もおそろべからず。彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云云。

一、各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみづしてたづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなる

あやまりなり。もし、からば南都北嶺にも、ゆ、しきがくしやう學生だちおほく座おほせられてさふらふなれば、かのひとくにもあひたてまつりて、往生の要、よくくきかるべきなり。親鸞にきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうぶりて信するほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をもはけみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせ、そらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮するところ愚身が信心にきては、かくのごとし。このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云云。

一、善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく。悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。

そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこ、ろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども自力のこ、ろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなる、ことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は、とおはせさふらひきと云云。

一、慈悲に聖道・淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐ、むなし。しかれどもおもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛まうすのみぞすえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云云。

一、親鸞は父母の孝養のためとて一返にても念佛まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもくこの順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにてはけむ善にてもさふらはこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすて、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦しづ

めりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云云。

一、專修念佛のともがらの、わが弟子ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと。もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人もたすさふらふ。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなる、ことのあるをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと、不可説なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすくもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云云。

一、念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず。諸善もおよぶことなきゆへに、無碍の一道なりと云云。

一、念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行するにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者の

ためには非行非善なりと云云。

一、念佛まふしさふらへども踊躍歡喜のこゝろをろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんとまうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓坊、おなじこゝろにてありけり。よく／＼案じみれば天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて、いよく／＼往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせざるは、煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよく／＼たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんするやらんと、こゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいままで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだむまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによくよく煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきてちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよく／＼大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知さふらへ。踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんとあやしくさふら

ひなましと云云。

一、念佛には無義をもて義とす。不可稱、不可説、不可思議のゆへにとおほせさふらひき。そもそもかの御在生のむかし、おなじこゝろさしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を當來の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひとつにともなひて念佛まうさるゝ老若そのかずをしらずおはしますなかに、上人のおほせにあらざる異義どもを、近來はおほくおほせられあふてさふらふよし、つたへうけたまはる。いはれなき條々の子細のこと。

一、一文不通のともがらの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、また名號不思議を信ずるか、いひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひひらかずして、ひとつのこゝろをまどはすことこの條かへすゝもこゝろをとめておもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、たもちやすくとなへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて念佛まうさるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのほからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議を信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつにして、さらにことなることなきなり。つきにみづからのほからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけは二様におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこゝろに往生の業をあげてまうすところの念佛をも、自行になすなり。こ

のひとつは名號の不思議をも、また信ぜざるなり。信ぜざれども邊地懈慢・疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへに、つゝに報土に生ずるは名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなれば、たゞひとつなるべし。

一、經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしのこと、この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實のむれをあかせるもろくの聖教は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる。そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや。まことにこのことはりにまよひはんべらんひとは、いかにもく學問して本願のむれをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども、聖教の本意をこゝろえざる條もとも不便のことなり。一文不通にして經釋のゆくちもしらざらんひとつの、となへやすからんための名號にておはしますゆへに易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり。雜行となづく。あやまて學問して名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文もさふらふぞかし。當時專修念佛のひとと聖道門のひとと評論をくはだて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりといふほどに法敵もいできたり。謗法もおこるなり。これしかしながら、みづからわが法を破謗するにあらずや。たとひ諸門こそりて念佛はかひなきひとつのためなり。その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のものゝ信ずればたすかるよしうけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとつのためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にたすまします。たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがためには器量およばざれば、つとめがたし。われもひとと生死をはなれんことこそ諸佛の御本意にておほしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありてあだをなすべきや。かつは

諍論のところにはもろくの煩惱おこる。智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信する衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、佛ときをかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる。またひとありてそしるにて、佛説まことなりけりとしられさふらふ。しかれば往生はいよ／＼一定とおもひたまふべきなり。あやまてそしるひとのさふらはざらんこそ、いかに信するひとはあれども、そしるひとのなきやらんとおぼつかなくさふらひぬべけれ。かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとはあらず、佛のかねて信謗ともにあるべきむねをしらしめして、ひとのうたがひをあらせじとときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。いまの世には學文してひとのそしりをやめ、ひとへに論議問答をむねとせんとかまへられさふらふにや。學問せばいよく如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんど、あやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをもときかせられさふらはゞこそ、學生の甲斐にてもさふらはめ。たま／＼なにごゝるもなく、本願に相應して念佛するひとをも學文してこそなんど、いひおどさるゝこと、法の魔障なり。佛の怨敵なり。みづから他力の信心かくるのみならず、あやまて他をまよはさんとす。つゝしんでおそるべし。先師の御こゝろにそむくことを。かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることをと云云。

一、彌陀の本願、不思議におはしませばとて惡をおそれざるは、また本願ほこりとして往生かなふべからずといふこと、この條本願をうたがふ善惡の宿業をこゝろえざるなり。よきこゝろのおこるも宿業のもよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには卯毛羊毛のさきにるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯圓坊は、わがいふことをば信するかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうされさふらひしかば、さらばわがいはんこと、たがふまじきかとかされておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀まうされてさからひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや。しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき。おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしとおほえさふらふとまうされてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし。なにごとともこゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあらず、また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしとおほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざること、おほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましますばとて、わざとこのみて惡をつくりて往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあしざまなることのきこえさふらひしと

き、御消息にくすりあればとて、毒をこのむべからずとこそあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく悪は往生のさばりたるべしとにはあらず。持戒持律にてのみ本願を信すべくば、われらいかてか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにもほこられさふらへ。さればとて身にそなへざらん悪業は、よもつくられさふらはじめものを、またうみかにはあみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりにのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなりと。さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうにおもひ。あるひは道場にはりぶみをして、なん／＼のことしたらんものをば道場へいるべからずなんどいふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚偽をいだけるものか。願にはこりてつくらんつみも宿業のもよほすゆへなり。さればよきこともあしきことも、業報にさしまかせてひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信抄にも彌陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なればすぐはれがたくとおもふべきとさふらふぞかし。本願にはこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しゆべきことにてさふらへ。おほよそ悪業煩惱を断じつゝしてのち本願を信ぜんのみぞ、願にはこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を断じなげすなはち佛になるとならば、佛のためには五劫思惟の願、その詮なくやましますさん。本願ほこりといましましめらるゝひとひとも、煩惱不淨具足せられてこそさふらふげなれば、それ願にはこらるゝにあらずや。いかなる悪を本願ほこり

といふ。いかなる悪かほこらぬにてさふらふべきぞや。かへりてこゝろをさなきことか。

一、一念に八十億劫の重罪を滅すと信すべしといふこと、この條は十惡五逆の罪人、日ごろ念佛をまうさずして、命終のときはじめて善知識のおしへにて一念まうせば、八十億劫の罪を滅し、十念まうせば八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるが滅罪の利益なり。いまだわれらが信するところにおよばず。そのゆへは彌陀の光明にてらされまいらするゆゑに、一念發起するとき、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろ／＼の煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましますば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念佛は、みなこと／＼く如來大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもふべきなり。念佛まうさんごとにつみをほろぼさんと信ぜんは、すでにわれとつみをけして、往生せんとはげむにてこそさふらふなれ。もししからは一生のあひだおもひとおもふことみな生死のきづなにあらざることなければ、いのちつきんまて念佛退轉せずして往生すべし。たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、また病惱苦痛をせしめて、正念に住せずしてをばらん、念佛まうすことかたし、そのあひだのつみをばいかゞして滅すべきや。つみきえざれば往生はかなふべからざるか。攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをはるとも、すみやかに往生をとぐべし。また念佛のまうされんも、たゞいまさとりをひらかんする期のちかづくにしたがひて、いよく彌陀をたのみ御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめ。

つみを滅せんとおもはんは自力のこゝろにして臨終正念といひのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてさふらふなり。

一、煩惱具足の身をもてすでにさとりをひらくといふこと、この條もてのほかのことにさふらふ。即身成佛は眞言秘教の本意、三密行業の證果なり。六根清淨はまた法華一乘の所説、四安樂行の威徳なり。これみな難行上根のつとめ、觀念成就のさとりなり。來生の開覺は他力淨土の宗旨、信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ不簡善惡の法なり。おほよそ今生にをいては煩惱惡障を斷せんときはめてありがたきあひだ、眞言法華を行する淨侶、なをもて願次生のさとりをいのる。いかにいはんや戒行難解ともになしといへども、彌陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそさとりにてはさふらへ。この身をもてさとりをひらくとさふらふなるひとは、釋尊のごとく種々の應化の身をも現じ、三十二相・八十隨形好をも具足して、説法利益さふらふにや。これをこそ今生にさとりをひらく本とはまふしきふらへ。和讃にいはいはく。金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてけるとはさふらへば、信心のさだまるときにひとたび攝取してすてたまはざれば、六道に輪廻すべからず。しかればながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらふをや。淨土眞宗には今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひさふらふぞとこそ聖人のおほせにはさ

ふらひしか。

一、信心の行者自然にはらをもたて、あしざまなることをもわかし、同明同伴にもあひて口論をもしてはかならず廻心すべしといふこと、この條斷惡修善のこゝちか。一向專修のひとにをいては、廻心といふことたゞひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて本願をたのみまいらするをこそ廻心とはまうしきふらへ。一切のことに、あしたゆふべに廻心して往生をとげさふらふべくは、ひとのいのちはいつるいき、いるいきをまたずしてをはることなれば、廻心もせず柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば、攝取捨の誓願をむなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ他力をたのみまいらするこゝろがけて邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけてもいよく願力をあをきまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれと彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わがはからはざるを自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらふよ

しうけたまはる。あさましくさふらふなり。

一、邊地の往生をとぐるひと、つるには地獄におつべしといふこと、この條いづれの證文にみえさふらふぞや。學生たるひとのなかに、いひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。經論聖教をばいかやうにみなされてさふらふやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて邊地に生じてうたがひのつみをつぐのひてのち報土のさとりをひらくとこそうけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つるにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如來に虚妄をまうしつけまいらせてさふらふなれ。

一、佛法の方に施入物の多少にしたがひて大小佛になるべしといふこと、この條不可説なり云云。比興のことなり。まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふ。かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらふも、それは方便法身のかたちなり。法性のさとりをひらひて長短方圓のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもてか大小をさだむべきや。念佛まうすに化佛をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ、大念には大佛をみ、小念には小佛をみるといへるか。もしこのことはりなんに、はしひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅蜜の行ともいひつべし。いかにたからものを佛前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなば、その詮なし。一紙半錢も佛法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて信心ふかくば、それこそ願の本意にてさふらばめ。すべて佛法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに同朋をいひをどさるゝにや。

右條々はみなもて信心のことなるよりことおこりさふらふが、故聖人の御ものがたりに 法然上人の御とき、

御弟子そのかすおほかりけるなかに、おなじ御信心のひともすくなくおはしけるにこそ。親鸞御同朋の御なかにして御相論のことさふらひけり。そのゆへは善信が信心も上人の御信心もひとつなりとおほせのさふらひければ、勢觀房・念佛房なんどまうす御同朋達、もてのほかにあらそひたまひて、いかでか上人の御信心に善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、上人の御智慧才覺ひろくおはしますにひとつならんとまうさばこそ、ひがごとならめ。往生の信心にをいてはまたくことなることなし。たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ詮ずるところ上人の御まへにて自他の是非をさだむべきにて、この子細をまうしあけければ、法然上人のおほせには、源空が信心も、如來よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も如來よりたまはらせたまひたる信心なり。さればたゞひとつなり、別の信心にておはしまさんひとは、源空がまいらざる淨土へは、よもまいらせたまひさふらはじとおほせさふらひしかば、當時の一向專修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともさふらふらんとおぼえさふらふ。いづれもくくりごとにてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとん御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをもまうしきかせまいらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめとなげき存じさふらひて、かくのごとくの義どもおほ

せられあひさふらふひとくにも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらばんときは、故聖人の御こゝろにあひかなひて御もちぬさふらふ御聖教ども、よく御覽さふらふべし。おほよそ聖教には眞實權假ともにあひまじはりさふらふなり。權をすてゝ實をとり、假をさしをきて眞をもちぬること、聖人の御本意にてはさふらへ。かまへて〳〵聖教をみみだらせたまふまじくさふらふ。大切の證文ども少々ぬきいでまいらせさふらふて、目やすにしてこの書にそへまいらせてさふらふなり。聖人のつねにおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懐さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流轉して、出離の縁あることなき身としれ」といふ金言にすこしもたがはせおはしませず。さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ。如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世

界は、よろづのこと、ひなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに。たゞ念佛のみごまことにておはします。とこそおほせはさふらひしか。まことにわれもひと、そらごとをのみまうしあひさふらふなかに、ひとつのいたはしきことのさふらふなり。そのゆへは念佛まうすについて信心のおもむきをもたしかに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論のたゝかひかたんがために、またくおほせにてなきことをも、おほせとのみまうすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。このむねをよく〳〵おもひときこゝろえらるべきことにさふらふなり。これさらにわたくしのことばにあらざといへども、經釋のゆくちをもしらず、法文の淺深をこころえわけたることもさふらばねば、さだめておかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむきを、百か一かたはしばかりをおもひいでまいらせて、かきつけさふらふなり。かなしきかなやさいはひに念佛しながら直に報土にむまれずして邊地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに信心ことなることなからんために、なく〳〵筆をそめてこれをしるす。なづけて歎異抄といふべし。外見あるべからず。

執持鈔

一、本願寺聖人の仰に云はく。

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに。臨終まつこと來迎たのむことは諸行往生のひとにいふべし。眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚に住す。正定聚に住するがゆへにかならず滅度にいたる。かるがゆへに臨終まつことなし、來迎たのむことなし。これすなはち第十八の願のことなり。臨終をまち來迎をたのむことは、諸行往生をちかひまします第十九の願のことなり。

一、又のたまはく。

是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲には、たゞ信心をさきとす。そのほかをばかへりみざるなり。往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をはからふべきにあらず。まして凡夫の淺智をや。かへすく如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。さればわれとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくべしともさだむべからず。故聖人（黒谷源空聖人の御）

となり)のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとへ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり。このたびもし善知識にあひたてまつらば、われら凡夫かならず地獄におつべし。しかるにいま聖人の御化道にあづかりて、彌陀の本願をきき、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、浄土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるを、いつはりて往生浄土の業因ぞと、聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは、明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかば、ひとりゆくべからず。師とともにおつべし。さればたと地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所、わたくしのさだむるところにあらずといふなり。これ自力をすて、他力に歸するすがたなり。

一、又のたまはく。

光明寺の和尙(善導の御こと)の大無量壽經の第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに、善惡凡夫得^ル生者莫^シ不^レ皆乘^ニ阿彌陀佛大願業力^ニ爲^リ増上縁^トといへり。このこゝろは、善人なればとてをのれがなすところの善をもて、かの阿彌陀佛の報土へむまるゝことかなふべからずとなり。惡人また申すにやおよぶ。己が惡業のちから三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや。しかれば善業も要にたゝず、惡業もまたさまたけとならず。善人の往生するも彌陀如來の別願、超世の大慈大悲にあらずば、かなひがたし。惡人の往生またかけてもおもひよるべき報佛報土にあざれども、佛智の不可思議なる奇特をあらはさんがためなれば、五劫があひだこれを思惟し、永劫があひだこれを行じて、かゝるあさましきものが、六趣四生よりほかはすみかもなく、うかむべき期なきがために、とりわきむねとおこされたれば、惡業に卑下すべからずとす、めたまふむねなり。さればをのれをわすれて、あふぎて佛智に歸するまことなくんば、をのれがもつところの惡業、なんぞ浄土の生因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて、三途八難にこそしづむべけれ。なにの要にかたゝん。しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生のためにはその要なし。惡もまたさきのごとし。しかればたと機、生得の善惡なり。かの土ののぞみ、他力に歸せずばおもひたえたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり。増上縁とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり。

一、又のたまはく。

光明名號の因縁といふことあり。彌陀如來、四十八願の中に、第十二の願は、我ひかりきはなからんとちかひたまへり。これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり。かの願、すでに成就して、あまねく無碍のひかりをもて、十方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にてらしめます。さればこのひかりの縁にあふ衆生、やうやく無明の昏闇うすくなりて、宿善のたねきざす時、まさしく報土にむまるべき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり。しかれば名號執持することさらに自力にあらず。ひとへに光明にもよほさる、によりてなり。これによりて光明の縁にきざ、れて名號の因をうといふなり。かるがゆへに宗師(善導大師の御ことなり)以光明名號攝化十方但使信心求念とのたまへり。但使信心求念といふは、光明と名號と父母のごとくにて、子をそだてはごくむべしといへども、子となりて、いでくべきたねなきには、ち、は、となづくべきものなし。子のあるときそれがためにち、といひ、は、といふ號あり。それがごとくに光明をは、にたとへ、名號をち、にたとへて、光明のは、名號のち、といふことも、報土にまさしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず。しかれば信心をおこして往生を求願するとき、名號もとなへられ、光明もこれを攝取するなり。されば名號につきて信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取不捨の、かひ成すべからず。彌陀如來の攝取不捨の御ちかひなくばまた行者の往生淨土のわがひ、なに、よりてか成せん。されば本願や名號、名號

や本願、本願や行者、行者や本願といふ、このいはれなり。本願寺の聖人の御釋、教行信證にのたまはく。德號の慈父ましますば、能生の因かけなん。光明の悲母ましますば所生の縁をむきなん。光明名號の父母、これすなはち外縁とす。眞實信の業識、これすなはち内因とす。内外因縁和合して報土の眞身を得證すとみえたり。これをたとふるに、日輪須彌の半にめぐりて他州をてらすとき、このさかひ闇冥たり。他州よりこの南州にちかづくとき、夜すてにあくるがごとし。しかれば日輪のいづるによりて夜はあくものなり。世のひとつねにおもへらく。夜のあけて日輪はいづと。今いふところはしからざるなり。彌陀佛日の照觸によりて無明長夜のやみすてにはれて、安養往生の業因たる名號の寶珠をばうるなりとしるべし。

一、私にいばく。

根機つたなくとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり。行業をろそかなりとてうたがふべからず、經に乃至一念の文あり。佛語に虛妄なし、本願あにあやまりあらんや。名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしくさだまるゆゑなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも、往生なを不定ならば、正定業とはなづくべからず。我すてに本願の名號を持念す。往生の業すてに成辨することよろこぶべし。かるがゆへに臨終にふたゝび名號をとなへずとも往生をとぐべきこと勿論なり。一切衆生のありさま過去の業因まち／＼なり。また死の縁、無量なり。やまひにをかされて死するものもあり、つるぎにあたりて死するものもあり、水にをばれ

て死するものもあり、火に焼て死するものもあり、乃至寢死するものもあり、酒狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり。さらにのがるべきにあらず。かくのごときの死期にいたりて、一旦の志心をおこさんほかは、いかでか凡夫のならひ名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束、もしたがはゞ往生ののぞみむなしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり。平生の時、不定のおもひに往せばかなふべからず。平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふべし。そもく南無は歸命、歸命のころは往生のためなれば、またこれ發願なり。このころあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義なり。この能歸の心、所歸の佛智に相應するときかの佛の因位の萬行、果地の萬徳、ことく名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。また殺生罪をつくるとき、地獄の定業をむすぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくのごとし。本願を信じ名號をととなれば、その時分にあたりて、かならず往生はさだまるなりとしるべし。

執持鈔終

口傳鈔上

本願寺の鸞聖人、如信上人に對しましめて、おりの御物語の條々。

一、あるときのおほせにのたまはく。黒谷の聖人(源空)淨土眞宗御興行さかりなりしとき、かみ一人よりはじめ、偏執のやから一天にみり。これによりてかの立宗の義を破せられんがために、禁中(時代不審、もし土御門院の御字歟)にして、七日の御逆修をはじめをこなはるゝついでに、安居院の法印聖覺の唱導として、聖道門の諸宗のほかに、別して淨土宗あるべからざるよし、これをまふしみだるべきよし勸請あり。しかりといへども、勸喚に應じながら師範空聖人の本懷さへきりて覺悟のあひだまふしみだらるゝにおよばず。あまさへ聖道のほかに淨土の一宗興じて、凡夫直入の大益あるべきよしをついでをもて、ことにまふしたてられけり。こゝに公廷にしてその沙汰あるよし、聖人(源空)きこしめすについて、もしこのときまふしやぶられなば、淨土の宗義なんぞ立せんや。よりて安居院の坊へおほせつかはされんとす。たれひとたるぞやのよし、その仁を内々えらばる。ときに善信御房その仁たるべきよし、聖人さしまふさる。同朋のなかにまたももしかるべきよし、同心に舉しまふされけり。そのとき上人(善信)かたく御辭退再三にをよぶ。しかれども、貴命のがれがたきによりて、使節として上人(善信)安居院の房へむかはしめたまはんとす。ときに絆もとも重事なり。すべからくひとをあひそへらるべきよし、まふさしめたまふ。もともしかるべしとて西意善緯の御房をさしそへらる。兩人安居院の坊にいたりて案内せらる。おりの

し沐浴と云云。御つかひたればとぞやとはる。善信の御房入來ありと云云。そのときおほきにおどるきて、このひとの御使たること邂逅なり。おぼろげのことにあらじとて、いそぎうしじゆ温室よりいで、對面。かみくだんの子細をつぶさに聖人(源空)のおほせとて演説。法印まふされていはく。このこと年來の宿念しよはんたり。聖覺いかでか疎簡を存ぜんたとひ勅定たりといふとも、師範の命をやぶるべからず。よりておほせをかうぶらざるさきに、聖道淨土の二門を混亂せず。あまさへ淨土の宗義をまふしたてはんべりき。これしかしながら王命よりも師孝をおもくするがゆへなり。御こゝろやすかるべきよしまふさしめたまふべしと云云。このあひだの一座の委曲つぶさにするにいとまあらず。すなはち上人善信御歸參ありて、公廷一座の唱導として法印重説のむねを聖人(源空)の御前にて一言もおとしましまさず分明にまた一座宣説しまふさる。そのときさしそへらるゝ善綽の御房に對して、もし紕繆ありやと聖人(源空)おほせらるゝところに、善綽の御房まふされていはく。西意、二座の説法聽聞つかうまつりをはりぬ。言語のをよぶところにあらずと云云。三百八十餘人の御門侶のなかに、その上足といひ、その器用といひ、すでに清撰にあたりて使節をつとめますとところに、西意また證明の發言にをよぶ。おそらくば多寶證明の往事にあひおなじきものをや。このこと大師聖人の御とき隨分の面目たりき。説導も涯分いにしへにはづべからずといへども、人師戒師、停止すべきよし聖人の御前にして誓言發願をはりき。これによりて檀越をへつらはず。その請におもむかずと云云。そのころ七條の源三中務の亟が遺孫、次郎入道淨信、土木の大功をへて一字の伽藍を造立して、供養のため唱導におもむきましますべきよしを屈請しまふすといへども、上人(善信)つゝもて固辭しおほせられて、か

みくだんのおもむきをかたりおほせらる。そのとき上人(善信)權者にましますといへども、濁亂の凡夫に同じて不淨説法のとが、をもちことをしめましますものなり。

一、光明名號の因縁といふ事。

十方衆生のなかに、淨土教を信受する機あり、信受せざる機あり。いかんとならば、大經のなかにとくがごとく、過去の宿善あつきものは今生にこの教にあふて、まさに信樂す。宿福なきものは、この教にあふといへども念持せざれば、またあはざるがごとし。欲知過去因の文のごとく、今生のありさまにて、宿善の有無あきらかにしりぬべし。しかるに宿善開發する機のしるしには、善知識にあふて開悟せらるゝとき、一念疑惑を生ぜざるなり。その疑惑を生ぜざることとは、光明の縁にあふゆへなり。もし光明の縁もよほさずば、報土往生の眞因たる名號の因をうべからず。いふこゝろは、十方世界を照曜する無碍光遍照の明朗なるにてらされて、無明沈没の煩惑漸々にとうけて、涅槃の眞因たる信心の根芽、わづかにきざすとき、報土得生の定聚のくらるに住す。すなはちこのくらるを光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨ととけり。また光明寺の御釋には以光明名號攝化十方、但使信心求念ともなたまへり。しかれば往生の信心のさだまることは、われらが智分にあらず、光明の縁にもよほしそだてられて名號信知の報土の因をうとしるべしとなり。これを他力といふなり。

一、無碍の光曜によりて無明の闇夜はるゝ事。

本願寺の上人(親鸞)あるとき門弟にしめしてのたまはく。つねにひとのしるところ、夜あけて日輪はいづや。日輪いでゝ夜あくや。兩篇なんたちいかんがしる と云云。うちまかせてひとみなおもへらく。夜あけてのち日いづと、こたへまうす。上人のたまはく。しからざるなり。日いでゝまさに夜あくものなり。そのゆへは、日輪まさに須彌の半腹を行度するとき、他州のひかりちかづくについて、この南州あきらかなれば、日いでゝ夜はあくといふなり。これはたとへなり。無碍光の日輪照觸せざるときは、永々昏闇の無明の夜あけず。しかるにいま宿善ときいたりて、不斷難思の日輪、貪瞋の半腹に行度するとき、無明やうやくやみはれて、信心たちまちにあきらかなり。しかりといへども、貪瞋の雲霧、かりにおほふによりて、炎王清淨等の日光あらはれず。これによりて煩惱障眠雖不能見とも釋し、已能雖破無明闇ものたまへり。日輪の他力いたらざるほどは、われと無明を破すといふことあるべからず。無明を破せずばまた出離その期あるべからず。他力をもて無明を破するがゆへに、日いでゝのち夜あくといふなり。これさきの光明名號の義に、こゝろおなじといへども、自力他力を分別せられんために、法譬を合しておほせごとありきと云云。

一、善惡二業の事。

上人(親鸞)おほせにのたまはく。某はまたく善もほしからず、惡もをそれなし。善のほしからざるゆへは、彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへに。惡のをそれなきといふは、彌陀の本願をさまたぐる惡なきがゆへに。しかるに世のひと、みなおもへらく。善根を具足せずば、たとひ念佛すといふとも、往生すべからずと。またたとひ念佛すといふとも、惡業深重ならば往生すべからずと。このおもひ、ともにはなはだしかるべからず。もし惡業をこゝろにまかせてとどめ、善根をおもひのまゝにそなへて、生死を出離し淨土に往生すべくば、あながちに本願を信知せずとも、なにの不足かあらん。そのこといづれもこゝろにまかせざるによりて、惡業をばをそれながらすなはちをこし、善根をばあらませどもうることをあたはざる凡夫なり。かゝるあさましき三毒具足の惡機としてわれと出離にみちたえたる機を攝取したまはんための、五劫思惟の本願なるがゆへに、たとあふぎて佛智を信受するにしかず。しかるに善機の念佛するをば決定往生とおもひ、惡人の念佛するをば往生不定とうたがふ。本願の規模こゝに失し、自身の惡機たることをしらざるになる。おほよそ凡夫引接の無縁の慈悲をもて修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ、五乘ひとしくいることは、諸佛いまだをこさざる超世不思議の願なれば、たとひ讀誦大乘解第一義の善機たりといふとも、をのれが生得の善ばかりをもて、その土に往生することかなふべからず。また惡業はもともろくの佛法にすてらるゝところ

なれば、惡機また惡をつのりとして、その土へのぞむべきにあらず。しかれば機にむまれしきたる善惡のふたつ、報土往生の得ともならず。失ともならざる條、勿論なり。さればこの善惡の機のうへにたもつところの彌陀の佛智を、つのりとせんよりほかは、凡夫いかでか往生の得分あるべきや。さればこそ惡もをそろしからずともいひ、善もほしからずとはいへ。こゝをもて光明寺の大師、言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上緣也とのたまへり。文のこゝろは、弘願といふは大經の說のごとし。一切善惡凡夫のむまるゝことをうるは、みな阿彌陀佛の大願業力にのりて増上緣とせざるはなしとなり。されば宿善あつきひとは、今生に善をこのみ、惡をそしる。宿惡をもきものは、今生に惡をこのみ善にうとし。たゞ善惡のふたつをば過去の因にまかせ、往生の大益をば如來の他力にまかせて、かつて機のよきあしきに目をかけて、往生の得否をさだむべからず。となり。これによりて、あるときのおほせにのたまはく。なんたち念佛するよりなを往生にたやすきみちあり。これをさづくべしと。ひとを千人殺害したらばやすく往生すべし。をのくこのをしへにしたがへいかんと。ときにある一人まふしてはいはく。某をいては千人まではおもひよらず。一人たりといふとも殺害しつべきこゝちせずと云云。上人かさねてのたまはく。なんぢわがをしへを日比そむかざるうへは、いまをしふるところにをいて、さだめてうたがひをなさざる歟。しかるに一人なりとも殺害しつべきこゝちせず

といふは、過去にそのたねなきによりてなりしも、過去にそのたねあらば、たとひ殺生罪をかすべからず、をかさばすなはち往生をとぐべからずといましむといふとも、たねにもよほされて、かならず殺罪をつくるべきなり。善惡のふたつ宿因のはからひととして、現果を感ずるところなり。しかればまたく往生にをいては、善もたすけとならず、惡もさはりとならずといふこと、これをもて準知すべし。

一、自力の修善はたくはへがたく、他力の佛智は護念の益をもてたくはへらるゝ事。

たとひ萬行諸善の法財を修したくはふといふとも、進道の資糧となるべからず。ゆへは六賊知聞して侵奪するがゆへに、念佛にをいてはすでに行者の善にあらず。行者の行にあらずとて釋せらるれば、凡夫自力の善にあらず。またく彌陀の佛智なるがゆへに諸佛護念の益によりて、六賊これををかすにあたはざるがゆへに出離の資糧となり、報土の正因となるなり、しるべし。

一、弟子同行をあらそひ、本尊聖教をうばひとること、しかるべからざるよしの事。

常陸の國、新堤の信樂房。聖人(親鸞)の御前にて法文の義理ゆへにおほせをもちまふさざるによりて、突鼻にあづかりて本國に下向のきざみ、御弟子連位房まふされてはいはく。信樂房の御門弟の儀をはなれて下國のうへは、あづけわたさるゝところの本尊聖教をめしかへさるべくやさふらふらんと。なかんづくに釋親鸞と外題のしたにあ

そばされたる聖教おほし。御門下をはなれたてまつるうへは、さだめて仰崇の儀なからん歟と云云。聖人のおほせにはく。本尊聖教をとりかへすこと、はなはだしかるべからざることなり。そのゆへは、親鸞は弟子一人ももたず。なにごとををしへて弟子といふべきぞや。みな如來の御弟子なれば、みなともに同行なり。念佛往生の信心をうることは釋迦・彌陀二尊の御方便として發起すとみえたれば、またく親鸞がさづけたるにあらず。當世たがひに違逆のとき、本尊聖教をとりかへし、つくるところの房號をとりかへし、信心をとりかへすなどいふこと、國中に繁昌と云云。かへすくしかるべからず。本尊聖教は衆生利益の方便なれば、親鸞がむつびをすて、他の門室にいるといふとも、わたくしに自專すべからず。如來の教法は總じて流通物なればなり。しかるに親鸞が、名字ののりたるを、法師にくければ袈裟さへの風情にいとひおもふによりて、たとひかの聖教を山野にすつといふとも、そのところの有情群類、かの聖教にすくはれて、ことごとくその益をうべし。しからば衆生利益の本懐、そのとき満足すべし。凡夫の執するところの財寶のごとくに、とりかへすといふ義あるべからざるなり。よくよく、ろうべし。とおほせありき。

一、凡夫往生の事。

おほよそ凡夫の報土にいることをば、諸宗ゆるさざるところなり。しかるに淨土眞宗をいいて善導家の御ころ安養淨土をば報佛報土とさだめいるところの機をば、さかりに凡夫と談ず。このこと性相のみをおどろかすことなり。さればかの性相に封ぜられて、ひとのころおほくまよひて、この義勢にをきてうたがひをいだく。そのうたがひのきざすところは、かならずしも彌陀超世の悲願をさることあらじとうたがひたてまつるまではなけれども、わが身の分を卑下して、そのことはりをわきまへしりて、聖道門よりは凡夫報土にいるべからざる道理をうかべて、その比量をもて、いまの眞宗をうたがふまでのひとはまれなれども、聖道の性相、世に流布するをなにとなく耳にふれならひたるゆへ歟。おほくこれにふせがれて、眞宗別途の他力をうたがふこと、かつは無明に惑惑せられたるゆへなり。かつは明師にあはざるがいたすところなり。そのゆへは、淨土宗のころ、もと凡夫のためにして聖人のためにあらずと云云。しかれば貪欲もふかく、瞋恚もたけく、愚癡もさかりならんにつけても、今度の順次の往生は佛語に虚妄なれば、いよく必定とおもふべし。あやまて、わがころの三毒も、いたく興成ならず、善心しきりにをこらば、往生不定のおもひもあるべし。そのゆへは、凡夫のための願と佛説分明なり。しかるにわがころ凡夫げもなくば、さてはわれ凡夫にあらねばこの願にもれやせんとおもふべきによりてなり。しかるにわれらがころすでに、貪瞋癡の三毒みなおなじく具足す。これがためとてをこさる願なれば、往生その機として必定なるべしとなり。かくころえつれば、ころのわるきにつけても、機の卑劣なるにつけても、往生せずばあるべからざる道理文證勿論なり。いづかたよりか凡夫の往生もれてむなしからんや。しかればすなはち、五劫の思惟も、兆載の修行も、たゞ親鸞一人がためなりと、おせごとありき。わたくしにはく。これをもてかれ

を案ずるに、この條、祖師聖人の御ことにかぎるべからず。末世のわれらみな凡夫たらんうへは、またもて往生おなじかるべし。

一、一切經御校合の事。

西明寺の禪門の父、修理の亮時氏、政徳をもはらにせしころ、一切經を書寫せられき。これを校合のために智者學生たらん僧を屈請あるべしとて、武藏左衛門入道(實名を知らず)ならびにやどやの入道(實名を知らず)兩大名におほせつけてたづねあなぐられけるとき、ことの縁ありて聖人をたづねいだしたてまつりき。(もし常陸の國、笠間の郡、稻田郷に御經廻のころ歟)聖人その請に應じまし〜て一切經校合ありき。その最中副將軍連々昵近したてまつるに、あるとき盃酌のみぎりにして種々の珍物をととのへて諸大名面々數獻の沙汰にをよぶ。聖人別して勇猛精進の僧の威儀をたゞしくしますことなければ、たゞ世俗の入道俗人等におなじき御振舞なり。よて魚鳥の肉味等をもきこしめさるること、御はゞかりなし。ときに鱒を御前に進ず。これをきこしめさるること、つねのごとし。袈裟を御着用ありながらまいるとき、西明寺の禪門、ときに開壽殿とて九歳。さしよりて聖人の御耳に密談せられてはいく。あの入道ども、面々魚食のときは袈裟をぬぎてこれを食す。善信御房いかなれば袈裟を御着用ありながら食しますすぞや。これ不審と云云。聖人おほせられてはいく。あの入道たちは、つねにこれをもちゐるについて、これを食するときは袈裟をぬぐべきこと、覺悟のあひだ、ぬぎてこれを食する歟。善信はかくのごときの食物邂逅なれば、おぼろけて、いそぎたべんずるにつきて、忘却してこれをぬがずと云云。開壽殿またまふされてはいく。こ

の御答御僞言なり。さだめてふかき御所存ある歟。開壽幼稚なればとて御蔑如にこそとてのきぬ。またあるときさきのごとくに袈裟を御着用ありながら御魚食あり。また開壽殿さきのごとくにたづねまふさる。聖人また御忘却とこたへまします。そのとき開壽殿、さのみ御廢忘あるべからず。これしかしながら幼少の愚意深義をわきまへしるべからざるによりて、御所存をのべられざるものなり。まげてたゞ實義の述成あるべしと再三こざかくのぞみまふされけり。そのとき聖人のがれがたくして、幼童に對してしめしまし〜てはいく。まれに人身をうけて生命をほろぼし、肉味を食すること、はなはだしかるべからざることなり。されば如來の制誡にもこのこと、ことにさかんなり。しかれども、末法濁世の今時の衆生、無戒のときなればたもつものもなく、破するものもなし。これによりて剃髮染衣のそのすがた、たゞ世俗の群類にこころおなじきがゆへに、これらを食すとても、食するほどならば、かの生類をして解脱せしむるやうにこそありたくさふらへ。しかるにわれ名字を釋氏にかるといへども、こころ俗塵にそみて智もなく徳もなし。なにによりてかかの有情をすくふべきや。これによりて袈裟はこれ三世の諸佛解脱幢相の靈服なり。これを着用しながらかれを食せば、袈裟の徳用をもて濟生利物の願念をやはたすと存じて、これを著しながらかれを食するものなり。冥衆の照覽をあふぎて、人倫の所見をばゞからざること、かつは無慚無愧のはなはだしきにいたり。しかれども所存かくのごとしと云云。このとき開壽どの、幼少の身として感氣おもてにあらはれ、隨喜もともふかし。一天四海をおさむべき棟梁、その器用はなさなきよりやうあるものなりとおほせことありき。

口傳鈔上終

口傳鈔中

一、あるとき親鸞聖人、黒谷の聖人の禪房へ御参ありけるに、修行者一人御どもの下部に案内していはく。京中に八宗兼學の名譽まします智慧第一の聖人の貴房やしらせたまへるといふ。この様を御どもの下部、御車のうちへまふす。鸞聖人のたまはく。智慧第一の聖人の御房とたづぬるは、もし源空聖人の御こと歟。しからばわれこそ、たゞいまかの御房へ参ずる身にてはんべれいかん。修行者まふしていはく。そのことにさふらふ。源空聖人の御ことをたづねまふすなりと。親鸞聖人のたまはく。さらば先達すべし。この車にのらるべしと。修行者おほきに辭しまふして、そのをそれあり、かなふべからずと云云。鸞聖人のたまはく。求法のためならばあなたがちに隔心あるべからず。釋門のむつびなにかくるしかるべき、たゞのらるべしとて、再三辭退まふすといへども、御どものものに、修行者かくるところのかご負をかくべしと御下知ありて、御車にひきのせらる。しかうしてかの御坊に御参ありて空聖人の御前にて鸞聖人、鎮西のものたまふして修行者一人、求法のためとて御坊をたづねまふしてはんべりつるを、路次よりあひともなひてまいりてさふらふ。めさるべきをやと云云。空聖人こなたへ招請あるべしとおほせあり。よりにて鸞聖人かの修行者を御引導ありて、御前へめさる。そのとき空聖人はたとかの修行者をにらみましますに、修行者また聖人をにらみかへしたてまつる。かくてややひさしくたがひに言説なし。しばらくありて空聖人おほせられてのたまはく。御房はいづくのひとぞ、またなにの用ありてきたれるぞやと。修行者まふしていはく。わ

れはこれ鎮西のものなり。求法のために華洛にのぼる。よて推参つかまつるものなりと。そのとき聖人、求法とは
いづれの法をもとむるぞやと。修行者まふしていはく。念佛の法をもとむと。聖人のたまはく。念佛は唐土の念佛
か、日本の念佛かと。修行者しばらく停滯す。しかれどもきと案じて、唐土の念佛をもとむるなりと云云。聖人の
たまはく。さては善導和尚の御弟子にこそあるなれと。そのとき修行者ふところより、つま硯をとりいだして二字
をかきてさぐ。鎮西の聖光房これなり。この聖光ひじり、鎮西にしておもへらく。みやこに世もて智慧第一と稱
する聖人おはすなり。なにごとかははんべるべき。われすみやかに上洛して、かの聖人と問答すべし。そのときも
し智慧すぐれてわれにかさまば、われまきに弟子となるべし。また問答にかたば、かれを弟子とすべしと。しかる
にこの慢心を空聖人権者として御覽せられければ、いまのごとくに御問答ありけるにや。かのひじりわが弟子とす
べきこと橋をたてゝもをよびがたかりけりと、慢幢たちまちにくだければ、師資の禮をなして、たごころに二字
をさぐげけり。兩三年のち、あるときかご負かおひて、聖光房、聖人の御前へまいりて本國戀慕のこゝろざし
あるによりて、鎮西下向つかまつるべし、いとまたまはるべしとまふす。すなはち御前をまかりたちて出門す。聖
人のたまはく。あたら修行者が、もとどりをきらんでゆくばとよと、その御こゑはるかにみゝにいりけるにや、たち
かへりてまふしていはく。聖光は出家得度してといひさし。しかるにもとどりをきらぬよしおほせをかうぶる、も
とも不審、このおほせにとまる耳によりて、みちをゆくにあたはず、ことの次第をうけたまはり、わきまへんがため
にかへりまいれりと云云。そのとき聖人のたまはく。法師にはみつのもとどりあり。いはゆる勝他・利養名聞これな

り。この三箇年のあひだ源空がのぶるところの法門をしるしあつめて隨身す。本國にくだりて人をかるんじしたが
へんとす。これ勝他にあらざや。それにつけてよき學生といはれんとおもふ。これ名聞をねがふところなり。これ
によりて檀越をのぞむこと所詮利養のためなり。このみつのもとどりをそりすてずば法師とはいひがたし。よてさ
まふしつるなりと云云。そのとき聖光房改悔のいろをあらはして負のそこよりおさむるところの抄物どもをとり
いでゝみなやきすてゝ、またいとまをまふしていでぬ。しかれどもその餘殘ありけるにや、つねにおほせをさしを
きて口傳にそむきたる諸行往生の自義を骨張して自障障他すること、祖師の遺訓をわすれ、諸天の冥慮をばから
ざるにやとおぼゆ。かなしむべし、をそるべし。しかればかの聖光房は最初に鸞聖人の御引導によりて黒谷の門下
にのぞめるひとなり。末學これをしるべし。

一、十八願につきたる御釋の事。

彼佛今現在成佛等。この御釋に世流布の本には在世とあり。しかるに黒谷本願寺兩師ともにこの世の字を略して
ひかれたり。わたくしにそのゆへを案ずるに、略せらるゝ條もともそのゆへある歟。まづ大乘同性經にいはく。淨土
中成佛悉是報身穢土中成佛悉是化身といへり。この文を依憑として、大師報身報土の義を成ぜらるゝに、この世の
字をきては、すこぶる義理淺近なるべしとおぼしめさるゝ歟。そのゆへは淨土中成佛の彌陀如來につきて、いま
世にましますと。この文を訓せば、いますこし義理いはれざる歟。極樂世界とも釋せらるゝうへは、世の字いかで
か報身報土の義にのくべきとおぼゆる篇もあれども、さればそれも自宗をいいて淺近のかたを釋せらるゝときの

往の義なり。おほよそ諸宗をいいて、おほくはこの字を淺近のときもちゐつたり。まづ俱舍論の性相(世間品)に安立器世間風輪最居下とて判ぜり。器世間を建立するとき、この字をもちゐる條分明なり。世親菩薩の所造もともゆへあるべきをや勿論なり。しかるにわが眞宗にいたりては、善導和尚の御こゝろによるに、すでに報身報土の廢立をもて規模とす、しかれば觀彼世界相勝過三界道の論文をもておもふに、三界の道に勝過せる報土にして正覺を成ずる彌陀如來のことをいふとき、世間淺近の事にもちゐるならひたる世の字をもて、いかでか義を成ぜらるべきをや。この道理によりていまの一字を略せらるゝかとみえたり。されば彼佛今現在成佛とつづけて、これを訓ずるに、かの佛いま現在して成佛したまへりと調ずれば、はるかにきよきなり。義理といひ、文點といひ、この一字もともあまれる歟。この道理をもて兩祖の御相傳を推驗して、八宗兼學の了然聖人に(ことに三論宗)いまの料簡を談話せしに、淨土眞宗をいいてこの一義相傳なしといへども、この料簡もとも同ずべしと云云。

一、助業をなをかたはらにします事。

鸞聖人、東國に御經廻のとき、御風氣とて三日三夜ひきかつかつて水漿不通します事ありき。つねのときのごとく、御腰膝をうたせらるゝこともなし。御煎物などいふこともなし。御看病のひとをちかくよせらるゝこともなし。三箇日とまふすとき、噫いまはさてあらんとおほせごとありて、御起居御平復もとのごとし。そのとき惠信の御房(男女六人、君達くんたちの御母儀)たづねまふされていほく。御風氣とて兩三日御寢のところ、いまはさてあらんとおほせごとあることなにごとぞやと。聖人しめしましたしてのたまはく。われこの三箇年のあひだ淨土の三部經

をよむことをこたらず。おなじくば千部よまばやとおもひてこれをはじめるところに、またおもふやう。自信教人信難中轉更難とみえたれば、みづからも信じ、ひとををしへても信ぜしむるほかは、なにのつとめかあらんに、この三部經の部數をつむこと、われながらもこゝろえられずとおもひなりて、このことをよく案じさだめん料にそのあひだはひきかづきてふしぬ。つねのやまひにあらざるほどに、いまはさてあらんといひつるなりと、おほせごとありき。わたくしにいほく。つらくこのことを案ずるに、ひとの夢想のつげのごとく、觀音の垂迹として一向專念の一義を御弘通あること揭焉なり。

一、聖人本地觀音の事。

下野の國さぬきといふところにて惠信の御房の御夢想にいほく。堂供養するとおぼしきところあり。試樂ゆゑし厳重にとりをこなへるみぎりなり。こゝに虚空に神社の鳥居のやうなるすがたにて、木をよこたへたり。それに繪像の本尊二鋪かゝりたり。一鋪は形體ましまさず、たゞ金色のみなり。いま一鋪はたゞしくその尊形あらはれまします。その形體ましまさざる本尊を、ひとありて、またひとにあらはなに佛にてましますぞやと問ふ。ひとにこたへていはく。これこそ大勢至菩薩にてまします、すなはち源空聖人の御ことなりと云云。また問ていはく。いま一鋪の尊形あらはれたまふを、あれはまたなに佛ぞやと、ひとこたへていはく。あれは大悲觀世音菩薩にてましますなり。あれこそ善信の御房にて、わたらせたまへとまふすとおぼえて、ゆめさめをはんぬと云云。このことを聖人にかたりまふさるゝところに、そのことなり大勢至菩薩は智慧をつかさどりまします菩薩なり。すなはち智慧は

光明とあらばるるによりて、ひかりばかりにて、その形體はましまさざるなり。先師源空聖人、勢至菩薩の化身にましますといふこと、世もてひとのくちにありと、おほせごとありき。覺聖人の御本地の様は御ぬしにまふさんと、わが身としてははかりあれば、まふしうだすにをよばず。かの夢想のちは心中に渴仰のおもひふかくして年月をおくるばかりなり。すでに御歸京ありて御人滅のよしうけたまはるるについて、わがちゝはかゝる權者にてましくけるとしりたてまつられんがためにしるしまふすなりとて、越後の國、國府よりとゞめをきまふさるる惠信の御房の御文、弘長三年の春のころ、御むすめ覺信の御房へ進ぜらる。わたくしにいはいはく。源空聖人勢至菩薩の化現として、本師彌陀の教文を和國に弘興しますます親鸞聖人、觀世音菩薩の垂迹として、ともにおなじく無碍光如来の智炬を本朝にかゞやかさんために師弟となりて口決相承しますますことあきらかなり。あふぐべし、たうとむべし。

一、蓮位房(聖人常隨の御門弟、眞宗稽古の學者、俗姓源三位賴政卿の順孫)の夢想の記。

建長八歲(丙辰)二月九日の夜、寅の時、釋の蓮位、夢に聖德太子の勅命をかうぶる。皇太子の尊容を示現して、釋の親鸞法師にむかはしめましくて、文を頌して親鸞聖人を敬禮しますます、その告命の文にのたまはく。敬禮大慈阿彌陀佛爲妙教流通來生者五濁惡時惡世界中決定即得無上覺也といへり。この文のころは、大慈阿彌陀佛を敬禮したてまつるなり。妙教流通のために來生せるものなり。五濁惡時惡世界のなかにして、決定してすなはち無上覺をえしめたるなりといへり。蓮位ことに皇太子を恭敬し尊重したてまつるとおぼへて、ゆめさめてすなはちこ

の文をかきをはりぬ。わたくしにいはいはく。この夢想の記をひらくに、祖師聖人あるひは觀音の垂迹とあらはれ、あるひは本師彌陀の來現としめしますますこと、あきらかなり。彌陀觀音一體異名ともに相違あるべからず。しかればかの御相承その述義を口決の末流他にことなるべき條、傍若無人といひつべし、しるべし。

一、體失不體失の往生の事。

聖人親鸞のたまはく。先師聖人源空の御とき、はかりなき法門評論のことありき。善信は念佛往生の機は體失せずして往生をとぐといふ。小坂の善惠房は證空體夫してこそ往生はとぐれと云云。この相論なり。ここに同朋のなかに勝劣を分別せんがために、あまた大師聖人(源空)の御前に參してまふされてはいはく。善信御房と善惠御房と法門評論のことばんべりとて、かみくだんのおもむきを一一にのべまふさるるところに、大師聖人(源空)のおほせにのたまはく。善信房の體失せずして往生すとたてらるる條は、やがてさぞと御證判あり。善惠房の體失してこそ往生すれとたてらるるも、またやがてさぞとおほせあり。これによりて兩方の是非わきまへがたきあひだ、そのむねを衆中よりかさねてたづねまふすところに、おほせにのたまはく。善惠房の體失して往生するよしのぶるは、諸行往生の機なればなり。善信房の體失せずして往生するよしまふさるるは、念佛往生の機なればなり。如來教法元と無二なれども、正爲衆生機不同なれば、わが根機にまかせて領解する條、宿善の厚薄によるなり。念佛往生は佛の本願なり。諸行往生は本願にあらず。念佛往生には臨終の善惡を沙汰せず、至心信樂の歸命の一心他力よりさだまるとき、即得往生住不退轉の道理を、善知識にあふて聞持する平生のきざみに治定するあひ

だ、この穢體亡失せずといへども、業事成辨すれば、體失せずして往生すといはるる歟。本願の文あきらかななり。かれをみるべし。つぎに諸行往生の機は臨終を期し來迎をまちえずしては胎生邊地までもむまるべからず。このゆへにこの穢體妄失するときはならずは、その期するところなきによりて、そのむねをのぶる歟、第十九の願にみえたり。勝劣の一段にをいては念佛往生は本願なるについて、あまねく十方衆生にわたる。諸行往生は非本願なるによりて定散の機にかざる。本願念佛の機の不體失往生と、非本願諸行往生の機の體失往生と、殿最懸隔にあらずや。いづれも文釋ことばにさきだちて歴然なり。

口傳鈔中略

口傳鈔下

一、眞宗所立の報身如來、諸宗通途の三身を開出する事。

阿彌陀如來を報身如來とさだむること、自他宗といはず、古來の義勢ことふりんたり。されば荆溪は諸教所讚多在彌陀とものべ、檀那院の覺運和尚は、また久遠實成彌陀佛永異諸經之所説と釋せらる。しかのみならずわが朝の先哲はしばらくさしをく、宗師(異朝の善導大師)の御釋にのたまはく。上從海徳初最如來乃至今時釋迦諸佛皆乘弘誓悲智雙行とて釋せらる。しかれば海徳佛より本師釋尊にいたるまで、番々出世の諸佛、彌陀の弘誓に乗じて自利々他したまへるむね顯然なり。覺運和尚の釋義釋尊も、久遠正覺の彌陀ぞとあらはるるうへは、いまの和尚の御釋にえあはすれば、最初海徳以來の佛々もみな久遠正覺の彌陀の化身たる條、道理文證必然なり。一字一言加減すべからず。ひとつの經法のごとくすべしとのたまはく。光明寺のいまの御釋は、もはら佛經に準ずるうへは、自宗正依經たるべし。傍依の經にまたあまたの證文あり。楞伽經にのたまはく。十方諸刹土衆生菩薩中所有法報身化身及覺皆從無量壽極樂界中出(文)ととけり。また般舟經にのたまはく。三世諸佛念彌陀三昧成等正覺ともとけり。諸佛自利利他の願行彌陀をもてあるじとして分身造化の利生方便をめぐらすこと、いちじるし。これによりて久遠實成の彌陀をもて報身如來の本體とさだめて、これより應迹をたるる諸佛通總の法報應等の三身はみな、彌陀の化用たりといふことをしるべきものなり。しかれば報身といふ名言は、久遠實成の彌陀に屬して、當住法身の體たるべし。通

總の三身は、かれよりひらきいだすところの淺近の機におもむくところの作用なり。されば聖道難行にたへざる機を、如來出世の本意にあらざれども易行易修なるところをとりどころとして、いまの淨土教の念佛三昧をば衆機にわたしてすすむるぞと、みなひとおもへる歟。いまの黒谷の大勢至菩薩の化現の聖人より、代々血脉相承正義をいではしかんばならず。海徳佛よりこのかた、釋尊までの説教、出世の本意、久遠實成の彌陀のたちとより法藏正覺の淨土のをこるをはじめとして、衆生濟度の方軌とさだめて、この淨土の機法とのほらざるほど、しばらく在世の權機に對して方便の教として五時の教をときたまへりとしるべし。たとへば月まつほどの手ずさみの風情なり。いはゆる三經の説時といふに、大無量壽經は法の眞實なるところをときあらはして、對機はみな權機なり。觀無量壽經は機の眞實なるところをあらはせり。これすなはち實機なり。いはゆる五障の女人章提をもて對機としてとをく末世の女人惡人にひとしむるなり。小阿彌陀經は、さきの機法の眞實をあらはす二經を合説して、不可以少善根福德因緣得生彼國とてとける無上大利の名願を、一日七日の執持名號にむすびとめて、こゝを證誠する諸佛の實語を顯說せり。これによりて、世尊説法時將了とて釋(光明寺)します。一代の説教むしろをまきし肝要、いまの彌陀の名願をもて附屬流通の本意とする條、文にありてみつべし。いまの三經をもて末世造惡の凡機にとききかせ、聖道の諸教をもてはその序文とすること、光明寺の處々の御釋に歷然たり。こゝをもて諸佛出世の本意とし、衆生得脱の本源とする條、あきらかなり。いかにいはんや諸宗出世の本懷とゆるす法華をいいて、いまの淨土教は同味の教なり。法華の説時八箇年中に、王宮に五逆發現のあひだ、このときにあたりて靈鷲山の會座を没して王宮に降臨して、他方

をとかれしゆへなり。これみな海徳以來乃至釋迦一代の出世の元意、彌陀の一教をもて本とせらるゝ大都なり。

一、信のうへの稱名の事。

聖人(親鸞)の御弟子に高田の覺信房(太郎入道と號す)といふひとありき。重病をうけて御坊中にして獲麟にのぞむとき、聖人(親鸞)入御ありて危急の體を御覽せらるるところに、呼吸のいきあらくして、すでにたへんとするに、稱名をこたらずひまなし。そのとき聖人たづねおほせられてのたまはく。そのくるしけさに念佛強盛の條、まづ神妙たり。たゞし所存不審いかんと。覺信房こたへまふされていはく。よろこびすでにちかづけり。存ぜんこと一瞬にせまる。刹那のあひだたりといふとも、いきのかよはんほどは往生の大益をえたる佛恩の報謝せずんばあるべからずと存するについて、かくのごとく報謝のために稱名つかまつるものなりと云云。このとき聖人(親鸞)年來常隨給仕のあひだの提撕そのしるしありけりと御感のあまり、隨喜の御落涙千行萬行なり。しかればわたくしにこれをもてこれを案ずるに、眞宗の肝要、安心の要須これにあるもの歟。自力の稱名をばげんで、臨終のときはじめ蓮臺にあなうらをむすべんと期するともがら、前世の業因しりがたければ、いかなる死の縁かあらん。火にやけ、みづにおぼれ、刀劍にあたり、乃至寢死までもみなこれ過去の宿因にあらずといふことなし。もしかくのごとくの死の縁、身にそなへたらば、さらにのがることあるべからず。もし怨敵のために害せられれば、その一刹那に凡夫としておもふところ怨結のほかなんぞ他念あらん。また寢死をいいては本心いきのたゆるきはをしらざるうへは、臨終を期する先途、すでにむなしくなりぬべし。いかんて念佛せん。またさきの殺害の機怨念のほか他あ

るべからず。さるうへは念佛するにいとまあるべからず。終焉を期する前途またこれもむなし。假令かくのごときらの死の縁にあらん機、日ごろの所存に違せば、往生すべからずとみなおもへり。たとひ本願の正機たりといふとも、これらの失、難治不可得なり。いはんやもとより自力の稱名の臨終の所期おもひのごとくならん定り邊地の往生なり。いかにいはんや過去の業縁のがれがたきによりて、これらの障難にあはん機、涯分の所存も達せんこと、かたきがなかにかたし。そのうへまた懈慢邊地の往生だにもかなふべからず。これみな本願にそむくがゆへなり。こをもて御釋(淨土文類聚鈔)にのたまはく。憶念彌陀佛本願自然即時入必定唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩とみえたり。たゞよく如來のみなを稱して、大悲弘誓の恩をむくひたてまつるべしと。平生に善知識のをしへをうけて信心開發するきざみ正定聚のくらゐに住すとたのみなん機は、ふたゞび臨終の時方に往益をまつべきにあらず。そのちの稱名は佛恩報謝の他力催促の大行たるべき條、文にありて顯然なり。これによりてかの御弟子最後のきざみに御相承の眼目相違なきについて、御感涙をながさるるものなり、しるべし。

一、凡夫として毎事勇猛のふるまひみな虚假たる事。

愛別離苦にあふて、父母妻子の別離をかなしむとき、佛法をたもち念佛する機、いふ甲斐なくなけきかなしむこと、しかるべからずとて、かれをばぢしめいさむること、多分先達めきたるともがらみなかくのごとし。この條聖道の諸宗を行學する機のおもひならはしにて、淨土眞宗の機教をしらざるものなり。まづ凡夫はことにをいてつたなくをろかなり。その好詐なる性の實なるをうづみて賢善な

るよしをもてなすはみな不實虚假なり。たとひ未來の生處を彌陀の報土とおもひさため、ともに淨土の再命をうたがひなしと期すとも、おくれさきだつ一旦のかなしみ、まどへる凡夫としてなんぞこれなからん。なかんづく曠劫流轉の世々生牛の芳契、今生をもて輪轉の結句とし、愛執愛著のかりのやど、この人界の火宅出離の舊里たるべきあひだ、依正二報ともにいかでかなごりおしからざらん。これをおもはずんば凡衆の攝にあらざるべしけなけならんこそ、あやまて自力聖道の機たる歟。いまの淨土他力の機にあらざる歟とも、うたがひつべけれ。をろかにつたなけにしてなけきかなしまんこと、他力往生の機に相應たるべし。うちまかせて凡夫のありさまにかはりめあるべからず。往生の一大事をば如來にまかせたてまつり、今生の身のふるまひこゝろのむけやう、くちにいふこと、貪瞋癡の三毒を根として殺生等の十惡穢身のあらんほどは、たちがたく、伏しがたきによりて、これをはなる、ことあるべからざれば、なか／＼をろかにつたなけなる煩惱成就の凡夫にて、たゞかりにかざるところなきすがたにてはんべらんこそ、淨土眞宗の本願の正機たるべけれとまさしくおほせありき。さればつねのひとは、妻子眷屬の愛執ふかきをば、臨終のきはには、ちかづけじみせじとひきさくるならひなり。それといふは、著相にひかれて惡道に墮せしめざらんがためなり。この條、自力聖道のつねのこころなり。他力の眞宗にはこの義あるべからず。そのゆへはいかに境界を絶離すといふとも、たもつところの他力の佛法なくば、なにをもてか

生死を出離せん。たとひ妄愛の迷心深重なりといふとも、もとよりかかる機をむねと攝持せんといてたちて、これがためにまうけられたる本願なるによりて、至極大罪の五逆謗法等の無間の業因ををもしとしましませざれば、まして愛別離苦にたへざる悲歎にさへらるべからず。淨土往生の信心成就したらんにつけても、このたびが輪廻生死のはてなれば、なげきもかなしみも、もともふかかるべきについて、あとまくらにならびぬて悲歎嗚咽し、ひだりみぎに群集して、戀慕涕泣すとも、さらにそれによるべからず。さなからんこそ凡夫げもなくて、殆ど他力往生の機には不相應なるかやとも、きははれつべけれ。さればみたらん境界をもぼとかるべからずなげきかなしまんをもいなむべからずと云云。

一、別離等の苦にあふて悲歎せんやからをば、佛法のくすりをすゝめて、そのおもひを教誘すべき事。

人間の八苦のなかに、さきにいふところの愛別離苦、これもとも切なり。まづ生死界のすみはつべからざることばかりをのべて、つぎに安養界の常住なるありさまをときて、うれへなげくばかりにて、うれへなげかぬ淨土をねがはずんば、未來もまたかゝる悲歎にあふべし。しかし唯聞愁歎聲の六道をわかれて、入彼涅槃城の彌陀の淨土にまうでんにはとこしらへおもむけば、闇冥の悲歎やうやくにあって、攝取の光益になどか歸せざらん。つぎにかゝるやからには、かなしみにかなしみをそふるやうには、ゆめゆめとぶらふべからず。もししからはとぶらひたるにはあらで、いよくわびしめたるに於てあるべし。酒はこれ忘憂の名あり。これをすゝめて、わらふほどになくさめてさるべし。さてこそ

とぶらひたるにてあれと、おほせあり、しるべし。

一、如來の本願は、もと凡夫のためにして聖人のためにあらざる事。

本願寺の聖人、黒谷の先徳より御相承とて、如信上人おほせられていはく。世のひとつねにおもへらく。惡人なをもて往生す。いはんや善人をやと。このことをくば彌陀の本願にそむき、ちかくば釋尊出世の金言に違せり。そのゆへは五劫思惟の劬勞、六度萬行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり。またく聖人のためにあらず。しかれば凡夫、本願に乗じて報土に往生すべき正機なり。凡夫もし往生かたかるべくば願虛説なるべし。力徒然なるべし。しかるに力願あひ加して十方衆生のために大饒益を成ず。これによりて正覺をとなへて、いまに十劫なり。これを證する恒沙の諸佛の證成、あに無虛妄の説にあらずや。しかれば御釋にも一切善惡凡夫得生者としてのたまへり。これも惡凡夫を本として善凡夫をかたはらにかねたり。かるがゆへに傍機たる善凡夫、なを往生せば、もはら正機たる惡凡夫、いかでか往生せざらん。しかれば善人なをもて往生す。いかにいはんや惡人をやといふべしとおほせごとありき。

一、つみは五逆謗法、むまるとしりて、しかも小罪もつくるべからずといふ事。

おなじき聖人のおほせとて、先師如信上人のおほせにいはく。世のひとつねにおもへらく。小罪なりとも

つみををそれおもひて、とどめばやとおもはゞ、こゝろにまかせてとどめられ、善根は修し行ぜんとおもはゞ、たくはへられてこれをもて大益をもえ、出離の方法ともなりぬべしと、この條眞宗の肝要にそむき先哲の口授に違せり。まづ逆罪等をつくること、またく諸宗のきて佛法の本意にあらず。しかれども、悪業の凡夫、過去の業因にひかれて、これらの重罪ををかす。これとどめがたく伏しがたし。また小罪なりともをかすべからずといへば、凡夫こゝろにまかせて、つみをばとどめえつべしときこゆ。しかれどももとより罪體の凡夫大小を論ぜず、三業みなつみにあらずといふことなし。しかるに小罪もをかすべからずといへば、あやまてもをかさば、往生すべからざるなりと落居する歟。この條もとも思擇すべし。これもし抑止門のこゝろ歟。抑止は釋尊の方便なり。眞宗の落居は彌陀の本願にきはまる。しかれば小罪も大罪も、つみの沙汰をしたくば、とどめてこそ、その詮はあれ、とどめえつべくもなき凡慮をもちながら、かくのごとくいへば、彌陀の本願に歸託する機、いかでかあらん。謗法罪はまた佛法を信するこゝろのなきよりをこるものなれば、もとよりそのうつはものにあらず。もし、改悔せばむまるべきものなり。しかれば謗法闡提廻心皆往と釋せらるゝこのゆへなり。

一、一念にてたりぬとしりて多念をばげむべしといふ事。

このこと多念も一念もともに本願の文なり。いはゆる上盡一形下至一念とて釋せらるゝ、これその文なり。しかれども下至一念は本願をたもつ往生決定の時尅なり。上盡一形は往生即得のうへの佛恩報謝のつとめなり。そのころ經釋顯然なるを、一念も多念もともに往生のための正因たるやうにこゝろえみだす條、すこぶる經釋に違せるもの歟。さればいくたびも先達よりうけたまはりつたへしがごとくに。他力の信をば一念に即得往生ととりさだめて、そのときいのちをばらざらん機は、いのちあらんほどは念佛すべし。これすなはち上盡一形の釋にかなへり。しかるに世のひとつれにおもへらく。上盡一形の多念も、宗の本意とおもひてそれにならばざらん機の、すてかてらの一念とこころうる歟。これすでに彌陀の本願に違し、釋尊の言説にそむけり。そのゆへは如來の大悲短命の根機を本としたまへり。もし多念をもて本願とせば、いのち一刹那につつまる無常迅速の機、いかでか本願に乗ずべきや。されば眞宗の肝要一念往生をもて淵源とす。そのゆへは願成就の文には、聞其名號信心歡喜乃至一念願生彼國即得往生住不退轉ととき。おなじき經の流通には其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利即是具足無上功德とも、彌勒に付屬したまへり。しかのみならず光明寺の御釋には、爾時聞一念皆當得生彼とてみえたり。これらの文證みな無常の根機を本とするゆへに、一念をもて往生治定の時尅とさだめて、いのちのぶれば、自然と多念にたよぶ道理をあかせり。されば平生のとき一念往生治定のうへの佛恩報謝の多念の稱名とならふところ文證道理顯然なり。もし多念をもて本願としたまはゞ、多念のきはまりいづれのとときとさだむべきぞや。いのちをはるときなるべくんば、凡夫に死の縁まち／＼なり。火にやけても死し、水にながれても死し、乃至刀劍にあたりても死し、れぶりのうちにも死せん。これみな先業の所感、さらにのがるべからず。しかるにもしかる業ありて

をはらん機、多念のをばりぞと期するところたぢろがずして、そのときかされて十念を成じ、來迎引接にあづからんこと、機としてたとひかれてあらますといふとも、願としてかならず迎接あらんこと、おほきに不定なり。されば第十九の願文にも、現其人前者のうへに、假令不與とてをかれたり。假令の二字をば、たとひとよむべきなり。たとひといふはあらましなり。非本願たる諸行を修して往生を備求する行人をも、佛の大慈大悲御覽じはなたずして、修諸功德のなかの稱名をよんどころとして現じつべくば、そのひとのまへに現ぜんとなり。不定のあひだ假令の二字ををかるも、もしさもありぬべくばといへるころなり。まづ不定の失のなかに、大段自力のくはだて本願にそむき、佛智に違すべし。自力のくはだてといふは、われとはからふところをきらふなり。つぎにはまたさきにいふところのあまたの業因、身にそなへんことかかるべからず。他力の佛智をこそ諸邪業繫無能礙者とみえたれば、さまたぐるものもなけれ、われとはからふ往生をば、凡夫自力の迷心なれば、過去の業因身にそなへたらば、あに自力の往生を障碍せざらんや。されば多念の功をもて臨終を期し、來迎をたのむ自力往生のくはだてには、加様の不可の難どもおほきなり。されば紀典のことばにも、千里は足のしたよりをこり高山は微塵にはじまるといへり。一念は多念のはじめたり。多念は一念のつもりたり。ともにもてあひはなれずといへども、おもてとし、うらとなるところを、ひとみなまぎらかすもの歎。いまのころは一念無上の佛智をもて、凡夫往生の極促とし、一形憶念の名願をもて佛恩報盡の經營とすべしと、つたふるものなり。

口傳鈔 下終

附錄 御傳鈔

本願寺聖人親鸞傳繪上

第一段

夫、聖人の俗姓は藤原氏、天兒屋根の尊二十一世の苗裔、大織冠鎌子内大臣の玄孫、近衛大將右大臣贈左大臣從一位内麻呂公號_{後長岡大臣}、或號_{閑院大臣}、贈正一位太政大臣房前公孫、大納言式部卿眞楯息なり。六代の後胤、弼の宰相有國の卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子なり。しかあれば、朝廷に仕て、霜雪をもいたゞき、射山に趁_つて、榮花をもひらくべかりし人なれども、興法の因うちに萌_も、利生の縁ほかにもよほし、によりて、九歳の春のころ、阿伯從三位範綱卿子_時、從四位上前若狹守、後白河の上皇の近臣なり。上人の養父。前大僧正慈圓慈鎮和尚是也。法性寺殿御息、月輪殿長兄。の貴坊へ相具奉て、鬢髮を剃除し給き。範宴少納言公と號す。自爾以來しばし、南岳天台の玄風を訪て、ひろく三觀佛乘の理を達し、とこしなへに楞嚴横川の餘流を湛て、ふかく四教圓融の義にあきらかなり。

第二段

建仁第三の曆春のころ上人廿九歳隱遁のころ、ろざしにひかれて、源空聖人の吉水の禪坊に尋まり給き。是則、世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきはめて、これをのべ給に、たちどころに、他力攝生の旨趣を受得し、飽まで、凡夫直入の眞心を決定しまし／＼けり。

第三段

建仁三年辛酉四月五日夜寅の時、上人夢想の告まし／＼き、かの記云、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を着服せしめ、廣大の白蓮華に端坐して、善信に告命してのたまはく、行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂文。救世菩薩、善信にのたまはく、これはこれわが誓願なり。善信この誓願の旨趣を宣説して、一切羣生にきかしむべしと云云。爾時善信、夢中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば、峨々たる岳山あり。その高山に、數千萬億の有情群集せりとみゆ。そのとき告命のごとく、此文のころを、かの山にあつまれ

る有情に對して、説きかしまめ畢とおぼえて、ゆめさめ畢云云。情、この記録を披てかの夢想を案ずるに、ひとへに眞宗繁昌の奇瑞、念佛弘興の表示也。しかれば、聖人後るとき、おほせられて云、佛教むかし西天より興つて、經論いま東土に傳る、是偏に上宮太子の廣徳、山よりもたかく、海よりもふかし。我朝欽明天皇の御宇に、これをわたされしによつて、すなはち淨土の正依經論等、此時に來至す。儲君もし厚恩をほどこしたまはずは、凡愚いかでか弘誓にあふことをえん。救世菩薩はすなはち儲君の本地なれば、垂迹興法の願をあらはさんがために、本地の尊容をしめすところなり。抑又大師聖人源空もし流刑に處せられたまはずは、我又配所におもむかんや。もしわれ配所に趣むかすんば、何によつてか邊鄙の群類を化せん。是なを師教の恩致なり。大師聖人すなはち勢至の化身、太子又觀音の垂迹なり。このゆへに、われ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり。眞宗これによつて興じ、念佛これによりて熾なり。是併ら、聖者の教誨によつて、さらに愚昧の今案をかまへず、彼二大士の重願、たゞ一佛名を專念するにたれり、いまの行者、錯て脇士につかふることなかれ。たゞちに本佛をあふぐべしと云云。故に、上人親鸞、傍に皇太子を崇たまふ。けだしこれ佛法弘通の浩なる恩を謝せんがためなり。

第四段

建長八年丙辰二月九日夜寅時、釋の蓮位夢想の告云、聖德太子、親鸞上人を禮し奉て曰、敬禮大慈阿彌陀佛、爲妙教流通來生者、五濁惡時惡世界中、決定即得無上覺也。しかれば、祖師上人は彌陀如來の化身にてましますといふことあきらかなり。

第五段

黒谷の先德源空在世のむかし、矜哀のあまり、或時は恩許を蒙て製作を見寫し、或時は眞筆を降して名字を書賜。すなはち「顯淨土方便化身土文類」六云親鸞上人選述。しかるに、愚禿釋鸞、建仁辛酉曆、棄雜行兮歸本願。元久乙丑歲、蒙恩恕兮書選擇。同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集内題字、并南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本、與釋綽空、以空眞筆令書之。同日、空之眞影中預奉圖書。同二年、閏七月下旬第九日、眞影銘以眞筆、令書南無阿彌陀佛。與若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生之眞文。又依夢告改綽空字、同日、以御筆、令書名之字畢。本師聖人、今年七旬三御歲也。選擇本願念

佛集者依禪定博陸月輪殿兼實、法名圓照之教命、所今選集。眞宗之簡要、念佛之奧義、攝在斯。見者易識。誠是、希有最勝之華文、无上甚深之寶典也。涉年涉日、蒙其教誨之人雖千萬、云親云疎、獲此見寫之徒甚以難。爾既書寫製作、圖書眞影。是專念正業之德也。是決定往生之徵也。仍抑悲喜之淚、註由來緣。云云。

第六段

凡源空聖人在世のいにしへ、他力往生の旨をひろめ給しに、世あまねくこれにこそぞり、人ことごとくこれに歸しき。紫禁青宮の政を重する砌にも、先黄金樹林の夢にこそ、ろをかけ、三槐九棘の道を正する家にも、直に四十八願の月をもてあそぶ。しかのみならず、戎狄の輩、黎民の類ひ、これをあふぎ、これを貴すといふことなし。貴賤轅をめぐらし、門前市をなす。常隨昵近の緇徒、そのかすあり、都三百八十餘人と云云。しかりといへども、親その化をうけ、勲その誨をまもる族、甚まれなり。わづかに五六輩にだもたらす。善信聖人あるとき申たまはく、予難行道を闇て易行道にうつり、聖道門を遁て、淨土門に入しより以來、芳命をうふるにあらずよりは、豈出離解脱の良因を蓄哉。喜の中の悦、なにごとか、れにしかん。しかるに、同室の好を結で、ともに一師の誨をあふぐ輩、これ多と

いへども、眞實に報土得生の信心を成じたらんこと、自他おなじくしりがたし、故に、且は當來の親友たるほどもしり、且は浮生の思出ともしはんべらんがために、御弟子參集の砌にして、出言つかふまつりて、面々の意趣をも試とおもふ、所望ありと云云。大師聖人のたまはく、この條ももしかるべし。すなはち、明日人々來臨のとき、おほせられいだすべしと。而しかるに翌日集會のところに、上人親鸞のたまはく、今日は、信不退、行不退の御座を、兩方にわかたるべきなり。何の座につきたまふべしとも、各各示給へと。そのとき三百餘人の門侶、みな其意をえざる氣あり。干し時、法印大和尚位聖覺、并に釋の信空上人法蓮、信不退の御座に可あ着と云云。次に沙彌法力熊谷直實入道遲參して申云、善信の御房の御執筆何事哉と。善信上人のたまはく、信不退、行不退の座をわけらる、なりと。法力房申て云、しからは法力もるべからず。信不退の座にまいるべしと云云。仍これをかきのせたまふ。こゝに數百人の門徒群居すといへども、更に一言をのぶる人なし。これ恐くは、自力の迷心に拘て、金剛の眞信に昏がいたすところ歎。人みな無音のあひだ、執筆上人親鸞自名をのせたまふ。や、暫ありて、大師聖人おほせられて云く、源空も信不退の座につらなり侍るべしと。そのとき、門葉あるひは屈敬の氣をあらはし、あるひは鬱悔のいろをふくめり。

第七段

上人親鸞のたまはく、いにしへわが大師聖人源空の御前に、聖信房、勢觀房、念佛房、以下の人々おほかりしとき、はかりなき評論をしはんべることありき。そのゆへは、聖人の御信心と、善信が信心と、いさ、かもかはるところあるべからず、たゞ一也と申たりしに、この人々とがめていはく、善信房の、聖人の御信心と、我信心とびとしと申る、こと謂なし、いかでかひとしかるべきと。善信申て云、なかひひとしと申ざるべきや。其故は、深智博覽にひとしからんと申ばこそ、まことにおほけなくもあらぬ。往生の信心にいたりては、ひとたび他力信心のことはりうけたまはりしより以來、全くわたくしなし。然しかるに聖人の御信心も、他力より給らせたまふ。善信が信心も他力也。故に、ひとしくしてかはるところなしと申也と、申侍しところに、大師聖人まさしくおほせられて云、信心のかはると申は、自力の信にとりての事也。すなはち智慧各別なるがゆへに、信又各別也。他力の信心は、善惡の凡夫ともに佛のかたよりのたまはる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心も、さらにかはるべからず。たゞ一なり。我かしくて信するにあらず、信心のかはりあふておはしまさん人々は、わがまるらん淨土へはよまるとりたまはじ。よく、こゝろえらるべき事なりと云云。こゝに面々舌を

卷、口を閉てやみにけり。

第八段

御弟子入西房、上人親鸞の眞影をうつし奉とおもふ心ざしありて、日ごろをふるところに、上人その心ざしあることをかきみて、おほせられて云、定禪法橋七條邊に居住にうつさしむべしと。入西房鑿察の旨を隨喜して、すなはちかの法橋を召請す。定禪左右なくまゐりぬ。すなはち尊顔に向たてまつりて申していはく、去夜奇特の靈夢をなん感ずるところなり。その夢の中に拜したてまつるところの聖僧の面僧、いまむかひたてまつる容貌に、すこしもたがふところなしといひて、たちまちに隨善感歎のいろふかくして、みづからその夢をかたる。貴僧二人來入す。一人の僧のたまはく、この化僧の眞影をうつさしめんとおもふこゝろざしあり。ねがはくば禪下筆をくだすべしと。定禪問て云、彼化僧たれひとぞや。件の僧の云く、善光寺の本願の御房これなりと。こゝに定禪たなごゝろをあはせ、ひざまづきて、ゆめの中におもふやう、さては生身の彌陀如來にこそと、身の毛いよだちて、恭敬尊重をいたす。また御くしばかりをうつされんに足ぬべしと云云。かくのごとく問答往復して、夢さめをはりぬ。しかるに、いまこの貴坊にまゐりてみたてまつる尊容、夢中の聖僧にすこしもたがはずと

て、隨喜のあまりなみだをながす。しかあれば夢にまかすべしとて、いまも御くしばかりをうつしたてまつりけり。夢想は仁治三年九月廿日夜なり。つらくこの奇瑞をおもふに、聖人彌陀如來の來現といふこと炳焉なり。しかればすなはち、弘通したまふ教行、おそらくは彌陀の直説といひつべし。あきらかに无漏の慧燈をか、けて、とをく濁世の迷闇をはらし。あまねく甘露の法雨をそ、ぎて、はるかに枯渴の凡惑をうるほさんがためなりと、仰べし、信すべし。

本願寺聖人親鸞傳繪 上終

本願寺聖人親鸞傳繪下

第一段

淨土宗興行によりて、聖道門廢退す。これ空師の所爲なりとて、たちまちに罪科せらるべきよし、南北の碩才憤申けり。「顯化身土文類」六云、竊以聖道の諸教は行證久廢、淨土の眞宗は證道今盛。然諸寺釋門、昏教兮不知眞假門戶。洛都儒林、迷行兮无辨邪正道路。斯以興福寺學徒、奏達太上天皇諱尊成、號後鳥羽院。今上諱爲仁、號土御門院。聖曆承元丁卯歲、仲春上旬之候。主上臣下、背法違義、成忿結怨。因茲、眞宗興隆太祖源空法師、并門徒數輩、不考罪科、猥坐死罪、或改僧儀賜姓名、處遠流。予其一也。爾者已非僧非俗。此故、以禿字爲姓。空師并弟子等、坐諸方邊州、經五年之居緒云云。空聖人、罪名藤井元彦、配所土佐國幡多鸞聖人、罪名藤井善信、配所越後國國府。此外門徒、死罪流罪皆略之。皇帝諱守成、號佐渡院。聖代建曆辛未歲、子月中旬第七日、岡崎中納言範光卿をもて、勅免。此時、聖人右のごとく、禿字を書て奏聞し給に、陛下睿感をくだし、侍臣おほきに褒美す。勅免ありといへども、かしこに化をほどこさんがために、なほしばらく在國したまひけり。

第二段

聖人越後國より常陸國に越て、笠間郡稻田郷といふところに、隱居したまふ。幽栖を占といへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉といへども貴賤衢に溢。佛法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す。この時、聖人おほせられてのたまはく、救世菩薩の告命をうけしいにしへのゆめ、すでにいまと符合せりと。

第三段

聖人、常陸國にして、專修念佛の義をひろめたまふに、おほよそ疑謗の輩はすくなく、信順の族はおほし、而に一人の僧山臥と云云。ありて、動すれば佛法に怨をなしつゝ、結句害心をさしはさんで、聖人を時々うかどひたてまつる。聖人板敷山といふ深山をつねに往返したまひけるに、彼山にして度々相待といへども、更にその節をとけず。つらく、繚の參差を案するに、頗る奇特のおもひあり。仍、聖人に謁せんとおもふこゝろつきて、禪室に行て尋申に、上人左右なくいであひたまひけり。すなはち尊顏にむかひたてまつるに、害心たちまちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし。や、しば

らくありて、有のまゝに日來の宿鬱を述すといへども、聖人又おどろけるいろなし。たちどころに弓箭をきり、刀杖をすて、頭巾をとり、柿衣をあらためて、佛教に歸しつゝ、終に素懷をとけき。不思議なりし事なり。すなはち明法房これなり。上人、これをつけたまひき。

第四段

聖人、東關の堺をいで、花城の路にをもむきましくけり。或日、晚陰におよんで箱根の險阻にかゝりつゝ、はるかに行客の蹤をおくりて、漸人屋の樞にちかづくに、夜もすでに曉更にをよんで、月もはや孤嶺にかたぶきぬ。于時、聖人あゆみよりつゝ、案内したまふに、まことに齡傾たる翁の正く裝束たるがいとこと、なくいであひたてまつりて云やう。社廟ちかき所のならひ、巫どもの終夜あそびし侍に、おきなもまじはりつるが、いまなんいさゝかよりのはんべると思ほどに、夢にもあらず、うつゝにもあらで、權現被仰云、たゞ今、われ尊敬をいたすべき客人、この路をすぎたまふべき事あり。かならず慇懃の忠節を抽で、殊に丁寧の饗應を儲くべしと云云。示現いまださめおはらざるに、貴僧忽爾として影向したまへり。何ぞたゞ人にましますん。神勅是炳焉なり。感應もとも恭敬すべしと云て、尊重囑請したてまつりて、さまざまに飯食を粧、いろくんに珍味を調けり。

第五段

聖人故郷に歸て往事をおまふに、年々歳々夢のごとし、幻のごとし。長安洛陽の栖も、あとをとむるに嬾とて、扶風馮翊ところどころに移住したまひき。五條西洞院わたり、これ一の勝地なりとて、しばらく居をしめたまふ。今比いにしへ、口決をつたへ、面受をとけし門徒等、をのく好をしたひ、路をたづねて參集したまひけり。そのころ、常陸國那荷西郡大部郷に、平太郎なにがしと云ふ庶民あり。聖人の訓を信じて、專貳なかりき。而に、或時件の平太郎、所務に駈れて熊野に詣すべしとて、事のよしを尋中がために、聖人へまゐりたるに、仰被云、夫、聖教萬差なり。いづれも機に相應すれば巨益あり。但末法の今時、聖道門の修行にをては成すべからず。則我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者といひ、唯有淨土一門可通入路と云云。此皆經釋の明文、如來の金言なり。而今、唯有淨土の眞説に就て、恭、彼三國の祖師、をのくこの一宗を興行す。所以愚禿勸るところ更に私なし。しかるに一向專念の義は、往生の肝腑、自宗の骨目なり。すなはち、三經に隱顯ありといへども、文といひ義といひ、ともにも明なるをや。「大經」の三輩にも、一何と勸て、流通にはこれを彌勒に付屬し、「觀經」の九品にも、しばらく三心と説て、これまた阿難に付屬す。「小經」の一心つるに諸佛こ

れを證誠す。これによりて論主一心と判じ、和尚一向と釋す。しかればすなはち何の文によるとも、一向專念の義を立すべからざるぞや。證誠殿の本地、すなはちいまの教主なり。かるがゆへに、ともかくとも衆生に結縁のこゝろざしふかきによりて、和光の垂迹を留たまふ。垂迹をとむる本意、たゞ結縁の群類をして願海に引入せんとなり。しかあれば、本地の誓願を信じて、一向に念佛をことゝせん輩、公務にもしたがひ、領主にも斷仕して、その靈地をふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の發起するところにあらず。しかれば、垂迹におひて、内壞虚假の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず。たゞ本地の誓約にまかすべし。穴賢穴賢。神威をかろしむるにあらず、努力々々冥眈をめぐらしたまふべからずと云云。これによりて平太郎熊野に參詣す。道の作法とりわき整儀なし。たゞ常没の凡情にしたがつて、さらに不淨をも刷ことなし。行住坐臥に本願をあふぎ、造次頭沛に師教をまもるに、はたして无爲に參著の夜、くだんの男夢告云、證誠殿の扉を排きて、衣冠たゞしき俗人仰せられて云、汝何ぞわれを忽緒して汗穢不淨にして參詣するやと。そのとき、かの俗人に對座して聖人忽爾としてまみえたまふ。その詞にのたまはく、彼は善信が訓によつて念佛するものなりと云云。爰に、俗人笏をたゞしくして、ことに敬屈の禮を著つゝ、かさねて述ところなしとみるほどに、ゆめさめをはりぬ。おほよそ、奇異のおもひをなすこといふべからず。下向の後、貴坊

にまゐりて、くはしく、此旨を申に、聖人そのことなりとのたまふ。これまた不思議の事なりかし。

第六段

聖人、弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より、いさゝか不例の氣まします。自爾以來、口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきことをのぶ。聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし。しかうして同第八日午時頭北面西右脇に臥給て、つゝに念佛のいきたえをはりぬ。于時、頽齡九旬に満たまふ。禪房は長安馮翊の邊押小路南萬里小路東、なれば、はるかに河東の路を歴て、洛陽東山の西麓、鳥邊野の南のほとり、延仁寺に葬したてまつる。遺骨を捨て、同山の麓、鳥邊野の北邊、大谷にこれをおさめ畢ぬ。しかるに、終焉にあふ門弟、勸化をうけし老若、をの／＼在世のいにしへをおもひ、滅後のいまをかなしみて、戀慕涕泣せずといふことなし。

第七段

文永九年冬のころ、東山西麓鳥邊野の北、大谷の墳墓をあらためて、同麓よりなを西、吉水の北の邊に、遺骨を掘渡して、佛閣をたて、影像を安す。此時に當て、聖人相傳の宗義いよく興じ、遺訓ま

すく盛なること、頗在世のむかしにこえたり。すべて門葉國郡に充滿し、末流處々に遍布して、幾千萬といふことをしらす。其稟教を重じて彼報謝を抽るともがら、縞素老少面々にあゆみを運で、年々廟堂に詣す。凡聖人在生の間、奇特これおほしといへども、羅縷に遑あらず。しかしながら、これを略するところなり。

奥書云

右縁起畫圖之志、偏爲知恩報德不爲戲論狂言。剩又染紫毫拾翰林、其體尤拙、其詞是苟。付冥付顯、有痛有恥。雖然、只憑後見賢者之取捨、無顧當時愚案之訛謬而已。

于時、永仁第三曆應鍾中旬第二天至晡時、終草書之篇畢。

畫工法眼淨賀號康樂寺、

本願寺聖人親鸞傳繪 下終

本願寺聖人親鸞傳繪二卷は、親鸞の其の生涯を傳へたる唯一の傳記である。斯の著を公にしたるは覺如であることは周知の事實である。覺如は本願寺第三世として所謂本願寺の基礎を築きたる英傑であり、親鸞を去ること遠からず、特に親鸞に而り其の教養を受けたる如信と共に在り、其の傳する所に屬するが故に、其の傳記の正確なるば言を俟たない。覺如壯年の時、親鸞のありし日を偲び戀慕やみ難く、京洛を出で、往時親鸞がさすらひし跡を巡り、遺跡を訪ひ、親鸞に師事せし多くの同朋に面謁し、親しく其の人々の記憶をたづね、而して綴れるもの、此の書に他ならのである。綴れる文に従ひて其の面影を法眼淨賀の繪筆に委ね、繪詞相俟つて親鸞の面目の躍如たるものがある。

御傳鈔終

親鸞著述表

年次	書	名	年齢	場所
元仁元年	教行信證	六卷	五二	常陸稻田
寶治二年	淨土和讃	一帖	七六	京都
建長二年	唯信鈔文意	一卷	七八	同
同三年	有念無念事	一章	七九	同
同四年	淨土文類聚鈔	一卷	八〇	同
同六年	淨土和讃	(再治)		同
同七年	高僧和讃 尊號眞像銘文 淨土三經往生文類 愚禿力事鈔 自他力事 皇太子聖德奉讃	(再治) 二卷 二卷 一卷 七十七首	八三	同
同八年(康元)	入出二門偈頌	一卷	八四	同

康元二年(正嘉)

正嘉二年	夢想靈告讃 聖德太子奉讃 三經往生文類 一念多念證文 與諸如來等事	百四十首 (再治) 一卷 二章	八五	同
正像末和讃	尊號眞像銘文 正像末和讃 自然法爾事	(再治) 一章 帖	八六	同
文應元年	正像末和讃	(再治)	八八	同

(已上の表中に猶ほ删除したものの二三を数へるが、文献の示す處に従ふて眞撰と考へらるゝものを表示したのである。併し親鸞の述作と其の撰述の年次は、異論も多く、今直ちに之れを決定することは不可能事に屬し、學者の研究に俟つべきものである)

註譯 愚禿親鸞全集 終

大正十一年九月廿四日印刷
大正十一年九月廿七日發行

不許
複製

▲愚禿親鸞全集▼
【正價金四圓】

著者	可西大秀
著者	蓮沼文範
發行者	東京市日本橋區鐵砲町六番地 磯部辰次郎
印刷者	東京市芝區受官町二丁目十五番地 大澤京之助
印刷所	東京市芝區受官町二丁目十五番地 三賞舍

發行所

東京市日本橋區鐵砲町六番地

磯部 甲陽 堂

振替東京 壹五〇五六番
電話神田 三四七二番

31-V89

高田集藏氏著	蓮沼文範氏著	宮崎安右衛門氏著	岡本一平氏著	中里介山氏著	曾禰繁丸氏著	栗原基氏 赤米吉氏 共譯	高島平三郎氏著	同
非僧非俗集	燃ゆる聖悦 <small>日蓮・親鸞 感想と書簡</small>	聖貧禮讚	出家と聖貧	泣虫寺の夜話	高野の義人	釋尊物語	スポルヂョン說教集	道話の林
定價金貳 送料金拾 錢圓	定價金壹圓參拾錢 送料金六 錢	定價金壹圓五拾錢 送料金八 錢	定價金壹圓參拾錢 送料金六 錢	定價金壹圓八拾錢 送料金拾 錢	定價金壹圓貳拾錢 送料金六 錢	定價金壹圓貳拾錢 送料金六 錢	定價金壹圓五拾錢 送料金八 錢	定價金貳 送料金拾 錢圓

終